個性:『ガチャ』のヒーローアカデミア

NTK

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガチャによってその日の個性が決まる個性を持った少年、真和須勝矢（まわす　かちや）。

これは、そんな彼がヒーローを目指すべく雄英に入り、クラスメイトと共に己を磨き、時に波乱な日常を過ごしていく物語。

※更新は遅いですが、温かく見守ってください。

主人公のその日の個性は頭の中でパッと浮かんだものや皆様のリクエストなどを採用する予定ですのでよろしくお願いします。

目次

No.1 入学試験 ―― 1
No.2 入学初日 ―― 5
No.3 個性把握テスト ―― 9
No.4 戦闘訓練 ―― 15
No.5 USJ襲撃（前編） ―― 21
No.6 USJ襲撃（後編） ―― 27
No.7 体育祭に向けて ―― 33
No.8 体育祭前トレーニング―1 ―― 38
No.9 体育祭前・戦闘訓練（前編） ―― 44
No.10 体育祭前・戦闘訓練（後編） ―― 50
No.11 体育祭前トレーニング―2 ―― 57
No.12 雄英体育祭： 第一種目 ―― 62
No.13 雄英体育祭： 第一種目〜第二種目開始 ―― 67

Ｎｏ．１　入学試験

「…ヨシッ！これならイケそうだ」

雄英高校、実技試験会場の前で真和須勝矢（まわすかちや）はそう呟いた。

この試験は会場内をうろつく仮想敵であるロボを倒し、それに振り分けられたポイントを集めて競うものである。受験生達は各々の個性に合わせた服装に着替えてたり、それぞれのルーティンをこなす中、彼が行った《ある行動》は少しばかし浮いていた。

（何やってんだあいつ…？）

（多分アレあいつの『個性』絡みだろうけど…）

（イケるって言ってたけど、どういう意味？）

彼の行動を見ていた受験生達は訝しんだが、深くは気にせず、もうすぐ始まるであろう試験に集中し始めた時であった。

『ハイ、スタート』

試験内容を説明していたプレゼント・マイクの気の抜けた声がスピーカー越しに聞こえ、受験生達は面食らった。何しろ先ほどの説明ではハイテンションで喋っており、スタートの合図もそのような感じだと思っていたからだ。

『どうしたどうしたぁ⁉？実戦にカウントなんざねぇんだぞ‼？走れ走れぇ‼？』

そこまで聞いて受験生達は一斉に走り出した。勝矢はというと、マイクが実戦に…と言った辺りで駆け出しており、いち早く会場にたどり着いた。

「ここだと得点の奪い合いが起きやすいな、もう少し奥にいくか…」

そう呟き、奥まで移動しようとしたが早速仮想敵であるロボに遭遇した。

「目標発見、ブッ殺ス‼？」

「うわ、口悪いな…まぁいいや、そらよ‼？」

彼は左手をロボにかざす。すると左手から稲妻が迸り、ロボに向かって放たれた。

「ピギャァァァ⁉？」

ロボは稲妻を浴びて行動不能となった。音を聞きつけたのか、複数のロボがワラワラと集まってきたが、勝矢は今度は右手をかざすとそこから突風が吹き荒れロボの群れを吹き飛ばし壁に叩きつけて破壊した。そのまま彼は先に進み、雷(左)と風(右)を使い分けながらロボを倒していった。

「すげっ…！」

「個性二つ持ち⁉？それか複合型…？にしてもすごい個性だ…！」

「ヤッベ、被ってるどころか上位互換じゃん！」

背後から聞こえる声を聞き、勝矢は苦笑した。

（強い個性か…ま、今日は強い個性だったわけで、違うやつだったら不味かったな…ほんと使えるな、この『半風半雷』）

『半風半雷』。左は雷を、右は風を発生させる。それが勝矢の今日の個性であった。それからしばらく移動・発見・撃破を繰り返していると突如地響きが鳴り響き、何事かとその方向を見てみると、ビルはどの大きさをしたロボが動き回っていた。恐らく試験前に言っていた『０ｐｔのお邪魔虫』というやつだろう。

「いや、デカいなオイ…倒してアピールしようと思ってたけど、変に無理して倒れるわけにもいかないからな…逃げるか。ポイントも十分だろうし」

彼と同じくその大きさに慄き、一目散にロボから逃げる受験生達を見つつ勝矢が呟くと、視界の隅に先ほど個性が被ってるとか言っていた金髪の少年が２ポイントのロボに囲まれているのが見えた。様子から見てどうやらピンチに陥っているようであった。

「あぁ、マズイマズイマズイ…！」

「セイヤァァ‼？」

すかさず勝矢はその少年の元に駆けつけてロボの群れに雷を浴びせて行動不能にした。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう。ちょうど電力が足んなくなってきたから助かった…」

「なるほど…電気を貯めるタイプの個性か？」

「あぁ。『帯電』って個性」
「ふむ、よし、俺の雷お前に流すから限界だったら言ってくれ。それでまだ試験続行できるだろ？」
「え？いいの？」
「構わない。時間が少ないから早くやるぞ」
　すぐに勝矢はその少年に向けて雷を浴びせ始めた。数秒程でストップしてくれと言われ止めたところで都合よくロボが数体こちらにやってきた。
「ちょうど良いな、ほら行ってきな」
「サンキュー‼？あ、お礼に言っておくけど、少し離れててくれ！電流操れるわけじゃないから巻き込みたくねぇ！」
「あいよ！」
　勝矢は風を使って空に舞い上がる。それを見届けた少年はロボに突っ込み、放電を起こしてロボを撃破する。それと同時に終了のアナウンスが響き渡った。

―――――

「ふぅ…疲れたなぁ…」
　会場の休憩室で飲み物を飲み一息ついていると、先ほどの少年がこちらを見つけ駆け寄ってきた。
「あ、いたいた！さっきはありがとうな！俺は上鳴電気。あんたは？」
「真和須勝矢。あれは困ってるの助けるのがヒーローだと思ったからな」
「そういやさ、あれだけ強い個性なら推薦もいけたんじゃないのか？」
「いや、推薦は無理だ。俺の個性は少々特殊でな、日によって異なるんだ。」
「ん？どういう事？」
「そうだな…お互い合格してまた会ったら教えるよ」
「カッコつけかぁ？まぁそれでいいぜ。それでどっちか不合格で会えなかったらクッソ恥ずいけどな」
「うっせ。じゃ、雄英で会おうな上鳴」
　そう言い勝矢は休憩室から出て行き、そのまま自宅へ帰っていっ

た。
自宅に着き、そのまま自分の部屋に入った勝矢はホッと息を吐いた。
「いや～良い個性が出て良かった。ありがとな」
そういい彼は自身の個性を発動し、出てきたソレを撫でた。
１ｍ程の大きさの四角柱のソレは『ガチャマシン』。

個性：『ガチャ』
一日一回引ける事ができ、出てきたカプセルの中に入ってる個性がその日使える。それが彼、真和須勝矢の個性である。

Ｎｏ．２　入学初日

入学試験から一週間後、ポストに投函されていた雄英高校からの手紙を自室の机に置き、勝矢は恐る恐る封筒を開けると中から小さな円形の機械が出てきた。

「…ん？何だこｒ『私が投影されたぁ‼？』うわびっくりしたっ‼？」

急に機械から何かが投影され、思わずのけぞった勝矢だが、すぐに落ち着いて投影されたものを見るとそこに投影されたのはスーツに身を包んだＮｏ．１ヒーローのオールマイトの姿であった。

「オ、オールマイト？」

『ＨＡＨＡＨＡ‼？驚いたかい？実は春から雄英で教師を務める事になってね。さて、気になる合否判定だが、筆記試験はどれも高得点で問題無し！そして実技試験だが、敵ポイント４０ポイント！トップクラスだ！だが審査対象はそれだけじゃあない！敵ポイントだけじゃなく、審査制の救助活動ポイントも存在していたのさ！君は他の受験生を助けたばかりか相手の個性を把握してその手助けをした！よって救助活動ポイント３５ポイント‼？合計７５ポイント‼？文句無しの合格だ‼？』

「…ヨッシ‼？」

合格しただけではなく、あのオールマイトから指導を受けられるといる事もあり、勝矢はあまりの嬉しさに笑っていた。

『それにしても真和須少年、なかなかにユニークな個性を持っているね！そのガチャにいったいどれだけの個性が…え？時間があまり無い？ンンッ‼？では……来いよ、真和須少年…ここが君のヒーローアカデミアだ！』

それを最後に映像は止まった。勝矢はしばらくの間、合格の喜びの余韻に浸った後、リビングで合否結果を待っている両親のもとに向かって行った。

―――――

「うわ…ドアデカいな…」

迎えた入学日、やたら広い校舎内を移動して１―Ａの扉前まで着

き、ドアを開けるとすでに何名か生徒がいた。
「お！お前も受かったんだな真和須！」
　こちらを見つけた上鳴が手を振っていたので勝矢は彼の元に近づいた。
「お前こそ、受かったんだな」
「最後のアレのおかげでな。それで、試験の時言ってたアレ、教えてくれよ」
「覚えてたのか。俺の本当の個性は『ガチャ』。ガチャマシンを出せてそれを回して出てきた個性がその日使えるってやつさ。ちなみに一日一回だ」
　それを聞いた上鳴は目を丸くした。恐らく知り合いにそのような個性を見たことがなかったのだろう。かく言う勝矢も自分と似た個性を持った人物を見たことがないのだが。
「マジかよ⁉？アレ以外に使える個性があるってわけか？」
「そ。まぁ戦闘向きなのとそうじゃ無い奴もあるけど」
「んじゃさ、もしあの日あの試験に向いてない個性が出たらどうする気だったんだ？」
「あぁ、その時はだな…」
「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここは、ヒーロー科だぞ」
　突然声が聞こえその方を向いてみると寝袋に包まった謎の男がゼリー飲料を飲みながら話していた。ボサボサの頭に整ってない髭というのもあり、不審者にしか見えなかった。
「はい静かになるまで８秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね。…担任の相澤消太だ。よろしくね」
　担任という言葉に一同は困惑していると、相澤は体操着を差し出し、これを着てグラウンドに集合と呼び掛けた。

―――――――――――――――

『個性把握テストぉ⁉？』
　突然個性把握テストをやると言い渡され、入学式はガイダンスはとまくし立てる生徒にヒーローになるならそんな悠長な時間はないと切り捨てた。だが中学の時と違い、個性の使用ありで行うようであ

る。試しにと爆豪という少年に個性ありでボールを投げさせると彼は死ねぇ!!?と叫びながら爆風と共にボールを投げた。
結果、７０５．２ｍという数値を叩き出し、周りがざわつき、誰かが『面白そう』と言った途端、相澤の雰囲気が変わった。
「面白そうか…ヒーローになるための3年間、そんな腹積もりでいるのかい？　…よし、トータル成績の最下位の者は見込み無しと判断し、《除籍処分》としよう」
『はぁぁぁぁ!!?』
爆弾発言に生徒達は絶叫し、一人が理不尽と抗議するも、ヒーローは世の中に宣う理不尽を乗り越えるもの、雄英は全力で君達に試練を与え続ける。『Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ』、全力で乗り越えてこいとの事であった。
それを聞き、勝矢は顔を青くした。
（ヤッベ～!?？これテストに不利な個性でたら不味いぞ!?？）
「んじゃあ始まるぞ。まずは５０ｍ走からな」
「あー相澤先生？俺、個性の関係上、今使っても構いませんか？」
「真和須か…あぁ、構わないぞ」
「ありがとうございます。あ、少し離れててくれ」
相澤からの許可を得て勝矢はガチャマシンを呼び出した。
「え？何これ？」
「ガチャガチャのやつ？」
「俺の個性。一日一回だけ回せてこれから出てくるカプセルに入ってる個性が今日使える」
「え？じゃあこのテスト向きじゃない個性だったら…」
「うん、不味いね…」
そう話す勝矢をひとりの少年、緑谷は不思議そうに見ていた。
（何だろう、あのガチャマシンにある数字…？）
緑谷が思ったようにガチャマシンには手で回すレバーの右上に『１３』の数字が書いてありその左下には小さく『３９／５０』と書いてあった。
「いいの出てくれよ～」

そう言い勝矢はレバーを二回半ほど回す。ガコンッ！と音が鳴り、銀のカプセルが出てきて中身を割ると中には『バネ』と書かれた紙が入っていた。
「よし！いける！」
すると紙とカプセルが消え、代わりに真和須の手足がバネ状に変化した。
《『個性：バネ』‼？手足がバネ状になって伸び縮みするぞ‼？バネの強さも変えられる‼？あんまり伸ばすと手足がつるぞ‼？》ｂｙプレゼント・マイク
「え？なになにそれ⁉？」
「出てきた個性に合わせて身体が変化するんだ。変に変化して体操着破れなくて良かった」
真和須の身体は出てきた個性に適したものに変化するのである。故にたまに体格が変化して服が破れる事もあるのだ。
「さ～て、今日の個性も決まったし、始めるとしますか」
軽く跳ねながら勝矢は個性把握テストを開始するのであった。

Ｎｏ．３　個性把握テスト

５０ｍ走

（飯田って奴、速いなぁ。脚から見て『エンジン』ってとこかな。蛙吹さんは見た目からして『蛙』かな。青山は…何だあれ？へそからレーザーが出てるな…芦戸さんは『酸』だな。出た事あるからほぼ正解だと思うけど、あとで聞いてみるかな）

自身の番が来るまでの間、勝矢はクラスメイト達の個性を予測していた。相手の個性の特徴を自身が過去に出たことのある個性の特徴と結びつけての予測のため、その的中率はかなりのものである。

やがて自分の番がやってきて、勝矢はスタートラインに立つ。スタートと同時に隣にいた爆豪の起こした爆風に煽られふらついたがすぐに体勢を立て直しバネの弾力及び張力を活かして跳ねるように駆けていった結果、５秒ジャストの記録を出した。

（爆風なければもう少し早く行けたかもな…）

握力

これに関しては普通に行ったが、元々様々な個性が出ても対応出来るように鍛えていたため、８２ｋｇの記録を出した。ふと勝矢がみると、ポニーテールの少女が万力を創り出して桁違いの記録を出していた。

（アレはアリなのか…というより、あの個性は…）

勝矢はその少女に近づき、話しかけた。

「えーと、八百万さんだっけ？その個性『創造』？中々に便利だよねそれ」

「ええ、そうですが…その言い方だと、以前に出たことがあるので？」

「まぁね。数えるくらいしか出たことないからあまり複雑なもの創れないけどね」

「そうですわね、私も正確なものを創るのにはだいぶ苦労しましたわ…」

同じ個性が出たという親近感からか、楽しそうに話し合ってる二人

をやたら背の小さな男子、峰田が恨めしそうな目で見ていたのは勝矢は知る由もなかった。

立ち幅跳び

「（このまま跳んでもいいけど、一応確認に…）相澤先生。これ、個性の範囲内で地面に足つかなければ何してもいいという認識でよろしいですか？」

「あぁ、その認識でいい」

「わかりました」

その後勝矢は足のバネの強さを上げたうえで縮ませ、それを一気に開放して高く跳び上がる。この時点で砂場をかなり飛び越しているが、あと数mで地に足がつくという瞬間

（今だ！）

勝矢はガチャマシンを呼び出し、それを足場にして再び跳躍した。

『えええ⁉？』

「ガチャ回したあとでも出せんのか⁉？」

「あれアリなんですか⁉？」

「個性で出したものだ。問題はない」

クラスメイトと相澤のやり取りを他所に勝矢は再び着地寸前にガチャマシンを出し、足場にするを繰り返す。やがてグラウンドの端に着き、Uターンして戻ってきたところで相澤に呼び止められる。

「真和須。それいつまで出来る？」

「えっと！召喚っ！自体にっ！体力はっ！あまり使いませんから！午前中っ！いっぱいはっ！続けられっ！ますっ！」

「ならいい、これ以上は時間の無駄だ。真和須、記録∞な」

勝矢はガチャマシンの上で飛び跳ねながら答えると相澤は気怠そうに呟き、タブレットに∞と出した。それを見たクラスメイト達はどよめいた。

「マジか、無限なんてあるんだ…！」

「これなら反復横跳びも好成績だせんじゃね？」

瀬呂の言葉とは裏腹に、その反復横跳びではバネの強さをうまく調

整できず無駄に飛び越してしまい、あまり良い成績は出せなかった。上体起こしも個性が発揮できないため普通の記録になった。
　しかし、長座体前屈では腕を思いっきり伸ばし、１４ｍという記録を生み出した。
「真和須だっけか？１４ｍってスゲェな！俺、切島鋭次郎。よろしくな！」
「あぁ。真和須勝矢だ。よろしく」
「でも、アレもう少し伸ばせそうな気がしたんだが、なんで出来なかったんだ？」
「アレ以上伸ばすと腕がつるんだ。次がハンドボール投げだから、影響すると不味いし」
「そっか、そういう事か」
　ハンドボール投げでは麗日という女子がボールを投げるとボールはフワフワと浮かぶように飛んでいき、いつまで経っても落ちてこず本日二度目の無限が出た。
（うーん、あれは『無重力』か。アレ意外と強い個性なんだよな）
　そんなことを考えていると勝矢の番がやってきた。勝矢は左腕にボールを当ててそのまま右手でパチンコのように引っ張った。
（角度は…これくらいか？弦が真っ直ぐじゃないから軌道は不安定だが、コースアウトはしないだろう。…良し！強度最大‼？）
「いっけぇぇ‼？」
　バネの強度を最大にし、手を離すとボールは勢いよく射出され、遠くに飛んで行った。記録は３５８．２ｍであった。
　その後、今までパッとした記録を出していなかった緑谷が何かを相澤から言われた後、二投目で７００ｍ越えの記録を出し、指を腫らしてまだ動けると答えた様子を見て勝矢は考えていた。
（全力を出すと体を壊すほどのパワーか…まだ制御が上手くいってないのか。あとでアドバイスしておくか）
　最後の持久走では跳ねすぎてコースアウトしないように気をつけながら進めていき、上位の記録を出した。流石に八百万が創造したバイクやエンジンの個性を持つ飯田には敵わなかったが。

結果発表する際に、最下位除籍はこちらの能力を引き出す為の合理的虚偽と相澤から言い渡され騒然となるが、勝矢は構わず順位表をみると5位であった。
「うん、まあまあかな」

個性把握テストが終わり、教室に戻ると勝矢の周りに何人か集まってきた。
「スッゲーな真和須！あの無限ジャンプ！」
「あれ以外にも個性があるんだろ？」
「他にはどんなのがあるの？」
「あ～その前にちょっといいか？何人かの個性当てるから。飯田がエンジン、蛙吹さんが蛙、芦戸さんが酸で麗日さんが無重力、切島は硬化で合ってるか？」
名指しされた者たちは目を見開き、口々に当たっていると答えた。すると代表して飯田が勝矢に話しかけた。
「もしかして、ぼ…俺達の個性がそのガチャとやらで出た事があるのかい？」
「正解。お互いに気付かなかった個性の応用があるかもしれないから、あとで情報交換したいが構わないか？」
是非頼む、私も！と承諾するなか、蛙吹は勝矢にぽつりとある質問をした。
「…けろっ。真和須ちゃん、一体いくつそのガチャに個性が入ってるの？」
「あーそれ気になるな！５～６０くらいか？」
蛙吹と切島の質問に皆がうんうん、とうなずくと勝矢はこう答えた。
「個性の数か？えっと……

少なくとも４００以上だな」

『４００以上⁉？』

予想外の数に一同が驚愕するなか、緑谷が彼に尋ねた。

「え、えっと…何でそれがわかったの？」

「閏年の年に、一年回して被ったのが１０回くらいしかなかった事があるのと、未だに出た事ない個性が出てくる事があるから。多分だが、恐ろしく排出率の低い個性があるかガチャを回す事でガチャという個性自体が成長して中身が増えてるかのどちらか、または両方だと思う。まぁ、ほとんど似た個性だったりあればちょっと便利程度の個性があるけどな。なんせ出来るのが一日一回だから全体数がわからないんだ。ちなみに無個性もある」

「は、はぁ…」

「でもそれだけあると個性の訓練が大変ね」

「そうだよな、下手したら次その個性が来るのが来年とかかもしれないからな…」

「そういう事」

勝矢の個性のメリットデメリットを聞きながら、緑谷はある事が気になった。

（あれ？じゃあ『あの数字』は何なんだろ？出てきた種類じゃないんだ…）

帰宅後、勝矢は自室のベッドに寝転がりながら今日のことを振り返る。

（やっぱあの感じ、相澤先生マジで除籍する気な気がするんだよなぁ…てか、俺かも思ったけど。ガチャで決まるなんて非合理的だし。ま、何か理由があるんだろう。それにしても…ガチャの話で思ったが…）

勝矢はガチャマシンを召喚する。その中にある大量のカプセルの中にひとつだけある『禍々しい程に黒いカプセル』を見ていた。

（これ、３歳の時から見たけど一度も出た事無いんだよな。何なんだろ？この個性…）

Ｎｏ．４　戦闘訓練

「わーたーしーがー!!?普通にドアから来た!!?」

午前の授業を終え、午後のヒーロー基礎学の授業にて、オールマイトが颯爽と登場すると、教室内は歓喜の渦に包まれた。そして彼が今日行うのは『戦闘訓練』。各自入学前に提出した『個性届』と『要望』に沿って業者に発注した『戦闘服（コスチューム）』に着替えてグラウンドβに集合との事である。

生徒達はそれぞれケースを持って更衣室で着替え始めた。

「いいじゃないか少年少女！カッコイイぜ！」

各々のコスチュームに着替えた彼らを見てオールマイトはそう評価する。勝矢のコスチュームは黒と銀、緑色のアーマーのような服装だが、胸部の左側と各所にはカプセルをあしらった飾りが付いていた。

また、出てきた個性に対応出来る様に、伸縮自在かつ彼の皮膚や髪の毛を元にした耐衝撃、対温度変化や酸などの科学変化に優れた素材となっており、障子や葉隠のような個性になっても対応可能なコスチュームとなっていた。また、ベルト部分には幾つかの小物入れが装着されていた。

結構な無茶振りの要望で上手く通るか不安だった勝矢だったが、むしろ業者側としてはかなり燃え上がり、複数の企業が合同で開発して完成したとの事だそうだ。

さて、オールマイトが今回の訓練について説明する。

内容は敵対ヒーローの二人一組の屋内戦闘訓練、設定としてはテロリストが市街地のアジト内に核兵器を隠し、それをヒーロー側が確保するというアメリカンなものである。制限時間は１５分で、ヒーロー側の勝利条件は相手２名の確保または核兵器の確保。敵側はタイムアップが相手２名の確保である。

「そして、チームと対戦相手を決めるのは…くじだ!!?」

「適当なのですか!?」

「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップすることもあるし、

そういうことじゃないかな…」
「なるほど、先を見据えた計らい…！　失礼致しました！」
「いいよ！　早くやろ！」
　くじを引き、それぞれチームメイトが決まる。勝矢が組んだのは砂藤であった。
「よろしくな、砂藤」
「あぁ、よろしく。それで真和須、今日の個性は？」
「まだ引いてない。本番に回せば相手に手の内を分からなく出来るだろ？」
「あ～確かにな。期待してるぞ」

　一回戦の緑谷・麗日ペア対爆豪・飯田ペアの戦いはヒーロー側の緑谷・麗日ペアの勝利だったものの、互いに課題の残る結果となった。
　まず爆豪はあからさまに私怨丸出しの行動を行い、飯田との連携はまるで取れてなかった。しかも『核兵器』を守ってる設定に関わらずビルを半壊させる攻撃を行ったのも良くなかった。同じことを言うならば天井をぶち抜いた緑谷も同様である。麗日は状況判断が甘く、実戦を意識していない戦い方であった。
　それを踏まえてＭＶＰは敵役を徹底した飯田と言われた時、本人はかなり感動していた。
　続く二回戦は轟・障子ペア対尾白・葉隠ペアは轟がビルごと凍結させ二人の動きを止めて、悠々と核兵器を確保し、あっという間に決着がついた。
「中々に面白い個性だな…」
「真和須、呼ばれたぞ？俺たち敵チームだってよ」
「ん？わかった」
　二人がビルに入ってくなか、オールマイトは生徒達に語りかける。ちなみに相手は芦戸・青山ペアである。
「さて！この二組についてわかることは？」
「ふむ…敵チームで言えば、砂藤君は増強系個性って聞いてるが…やはり対応が難しいのは真和須君ではないでしょうか？」

「そうですわね。４００以上もの個性がある中、ピンポイントで対策を練るのは難しいかと…」
「ヒーローチームは二人とも中～遠距離が得意だから砂藤ちゃんへの対策はできそうだけど、真和須ちゃんが何の個性を出すかによっては一気に不利になりかねないわね」
飯田、八百万、蛙吹がそれぞれ答えるとオールマイトはその通り！と答えた。
「実際の戦闘では相手の個性がわかっていない状態での戦闘が大部分だが、真和須少年の場合はわかっていても対策がし辛いのが彼の大きなメリットだ！この戦闘では真和須少年が出す個性によって戦況が大きく変わるだろう！」
「お、真和須がガチャを始めたみたいだぞ‼？」
切島の言葉を聞き、一同はモニターを見る。出てきたカプセルを割って中身を見た瞬間、勝矢はなんてこったと言ったような顔を浮かべた。
「……何か、ハズレっぽいのが出たみたいだな？」
「もしかして、無個性とか？」
「ちょうど体で見えないね～」
勝矢の反応に疑問を持つなか、ちょうど勝矢が体を動かし、個性が書かれた紙が見えた。それを見た一同はその内容に唖然とした。
『…『さしすせそ』？』

勝矢ｓｉｄｅ
「…すまん砂藤、個性面ではサポート出来なさそうだ…」
「えっと、とりあえずその『さしすせそ』ってどんな個性なんだ？」
核兵器を設置した部屋で、申し訳なさそうな顔で話す勝矢に砂藤が質問すると、勝矢はその個性について説明した。
「砂藤、料理のさしすせそって知ってるよな？」
「あぁ。砂糖、塩、酢、醤油（せうゆ）、味噌だろ？それがどうしたんだ？」
「それが両手から出てくる。それが『個性：さしすせそ』だ。ちなみ

に味はその日の体調次第だ」
「……」
　黙ってこちらを見ている砂藤に勝矢はヤケクソ気味に叫び出した。
「そうだよ‼?‼?ホント悪いと思ってるよ！でも、個性が無くとも戦えるから心配ねぇから…」
「いや、そうじゃなくて…砂糖、出せんだよな?俺の個性、砂糖摂取すると強くなるから出してくれるとありがたいんだが…」
「…マジでッ⁉?⁉?よっしゃいくらでも出してやるからな！」

―――――

「何やってんだアレ?」
「何か、ヤバイ薬の取り引きみたいだな…」
　上鳴と瀬呂がそういうのも無理はない。彼らの目に映るのは勝矢が手から何か白い粉を小物入れに詰めて砂藤に渡している光景だからである。
「オールマイト…あれは大丈夫なんですか?」
「大丈夫だ飯田少年、アレは砂糖だ。砂藤少年の個性を引き出すために渡してるようだ」
「砂糖?もしかしてさしすせそって、料理のやつ?」
「手から調味料が出てくる個性か…！確かに当たり外れが大きいな」
「砂藤じゃなければあまり役に立ちそうにない個性だな…いや、でも酢とか醤油で目潰しくらいにはなるか?」
　そう話しているうちに砂藤が部屋から出ていった。数分後、芦戸・青山ペアと接敵し、事前に砂糖を摂取し個性を発動させたうえで二人を襲撃する。すぐに二人は避け、距離を取る。すると砂藤は芦戸の方に向かって行った。どうやら青山の相手は勝矢がするようである。
「真和須のやつ、あの個性でどう青山を相手にするんだ?」
「やっぱ目潰しか?」
「上鳴、アンタさっきからエグいよ?」
(フフ…まだまだだな少年少女達…ヒーローの強さは何も個性の強さで決まるものでは無いのだよ！恐らく、私の予想が正しければ真和須少年は…)

「見つけた☆」
　フリーとなった青山はビル内を彷徨いてようやく核兵器のある部屋にたどり着いた。
（あとは確保するだけだけど…真和須くんがいないね☆僕を探そうとして離れたのかな？いや、彼の個性がわからない以上、隠れてるかもしれないし、油断しないようにしなきゃ☆）
　そう考え、慎重に核兵器に近づく青山だったが、あと２ｍ程というところで核兵器の陰に隠れていた勝矢が飛び出し、接近してきた。すかさず青山は自身の個性であるネビルレーザーを彼の足元に放つが、勝矢はそれを躱し、肉薄する。
「レーザー撃つときポーズ付けるのは良くないかな。軌道がわかりやすい」
「えっ？ワァ⁉？」
　それだけ言うと勝矢は青山を掴み、そのまま一本背負いの要領で地面に投げられ、そのまま確保となった。砂藤の方も、効果が切れる前に砂糖を摂取しパワーを維持し続けた結果、芦戸を追い詰め確保し、勝矢達敵チームの勝利となった。

「真和須、スゲーな最後の接近戦！普段からトレーニングしてるのか？」
「まぁな。そうでもしないとあぁいう個性の時どうしようもなくなるからな」
「なるほど…！万が一のため個性に頼らない戦い方も考えておくとは…！」
「なぁなぁ！あとで味噌出してくれへん？」
「あ、あぁ。構わないが…」
　講評では勝矢がＭＶＰとなった。出てきた個性に戸惑ったものの、偶然とはいえ有効な活用法を見つけて味方をサポートした事と、最後の迅速な確保が評価されたようである。
　なお、放課後に麗日用にと八百万が創ったタッパーに味噌を手のひ

らから出して詰めてたのだが、出し方がう〇こみてぇと瀬呂に言われ、彼が耳郎にシバかれるまで落ち込んでいたのは別の話である。

Ｎｏ．５　ＵＳＪ襲撃（前編）

戦闘訓練から数日が経ち、今日のヒーロー基礎学は人命救助訓練ということとなり、広大すぎる雄英の敷地内にある演習場までバス移動となった。コスチュームの着用は各自の判断との事だが、勝矢の場合は個性によっては体格が変わって服が破れることもあるのでコスチュームを着ての参加である。

「バスの席順でスムーズにいくよう番号順に二列で並ぼう‼?」

先日クラスの委員長に決まった飯田はホイッスルを鳴らして誘導したが、実際のバスの席は三方シートと呼ばれるタイプのものだったため、徒労に終わった。

「私、思ったことは何でも言っちゃうの。緑谷ちゃん、あなたの個性、なんだかオールマイトに似てる」

唐突に蛙吹が緑谷にそう話すと緑谷は何故か目に見えて動揺するが、それに切島が待ったをかけた。

「待てよ梅雨ちゃん、オールマイトは怪我しねぇぜ?多分似て非なるアレだぜ?」

「いや、もしかして個性に身体が追いついてないだけかもしれない。恐らく制御できれば怪我せずに力を発揮できるかもしれないな」

「うん、真和須君の言う通り、まずは怪我しないように制御することを優先しようと思うんだ…」

「シンプルな増強系の個性はいいな。派手でやれる事も多い！俺の硬化は対人じゃ強いけど、いかんせん地味だしな…」

「そんなことはないよ、僕は凄くカッコいいと思いし、プロにも通用する個性だよ！」

「それに、硬化もある意味シンプルだ。守りにも攻めにもなるし、ちょっとした応用もある。今度そのやり方を教えよう」

「お、頼む‼?真和須なりの使い方があるんならいい成長になるし！それで、派手で強いといったら轟と爆豪だよな！」

「でも爆豪ちゃんキレてばかりだから人気出なさそ」

「ンだとコラ！出すわ！」

和気藹々と話すなか、真和須は先日起きたマスコミの侵入事件について考え始めた。
（そういえば…彼らはどうやって雄英のセキュリティを突破したんだ？個性を使用したってんならそれでおしまいだが、今日の授業が三人体制になった事と関係あるのか？）

バスを降りた彼らを迎えたのは関西にある某大型テーマパークのような場所であった。その名も嘘の（Ｕ）災害や（Ｓ）事故ルーム（Ｊ）、通称『ＵＳＪ』であった。
（ホントにＵＳＪだった…！）
その後、合流した担当教師の１３号先生による『個性』に関する大事な話をした。端的にいえば一歩間違えば容易く人の命を奪えるものもある個性を自分達が持っているという事を自覚すること、その個性は人を傷付ける為でなく、人を救う為にある事を知って欲しいとのことである。
話を終え、いよいよ授業が始まるという時であった。突如として中央広場から謎の黒い靄みたいなものが出現し、そこからわらわらと明らかに友好的ではない集団が現れた。
「全員一塊になって動くな‼？１３号、生徒達を守れ‼？」
相澤が血相を変えて叫び、何事かと生徒達はざわつく。そして相澤が言うには、彼らは敵（ヴィラン）とのことであった。
どうやら雄英内のセンサーを無効に出来るような個性を持った奴が相手にいるようで、それでこちらに奇襲をかけてきたようである。
その後、相澤が敵たちの相手をし１３号が避難誘導をしようとした時、人型のモヤが現れる。それが話すに彼らは敵連合で今回の目的は諸事情でここに居ないオールマイトの抹殺との事であった。話を続けるモヤ男に爆豪と切島が攻撃を仕掛け、そのせいで１３号が彼の対処に遅れた結果、黒いモヤが生徒達を包み込んだ。

「痛た…ここは？」
背中を地面に打ち付けた勝矢が背をさすりながら立ち上がるとど

うやらここは土砂災害を模したエリアのようであった。
「真和須、お前もここに飛ばされたのか」
「轟か。…どうやら、囲まれたようだな」
二人が見渡すと数十人ほどの敵がこちらを取り囲み、ニヤついていた。
「下がっていろ、ここは俺が…」
轟が一歩進み、戦闘訓練の時のように一気に周りを凍結させようとするが、勝矢はそれを手で制した。
「待て、戦闘訓練の時みたく広範囲を凍結させるつもりならやめとけ」
「…？何故だ？」
「飛ばされる前、俺の近くに葉隠さんがいた。もしかしたらこの近くにいるかもしれない。このままやったらあいつらと一緒に凍らせちまう」
「っ！そういうことか…だが近くにいるなら声くらいだすだろ？」
「ここに飛ばされた時に打ちどころが悪くて気絶してるとしたら？とにかく、やるなら一人ずつだ。今からガチャを回すから少しの間頼む」
わかった、と轟が答えると彼は近くにいた敵に近づき、一人ずつ凍結させる。勝矢はすぐさまガチャマシンを召喚し、ガチャを回す。
（ここで変なのきたら恨むぞ…！）
すぐにカプセルが出てきてそれを割って中身を確認した時であった。勝矢の近くの地面が盛り上がり、そこからモグラの姿をした敵が躍り出た。
「ギャハハハ‼？死ねぇぇぇ‼？」
「真和須⁉？」
轟が勝矢を案じ振り向いた時であった。
—ボコォ‼？
大きな殴打音の後、モグラ敵はくの字になって吹っ飛んだ。
「…フゥ、良かった。俺のお気に入りの個性だ」
「真和須…か？」
そう轟が質問するのも無理はない。今の彼は所謂異形系となって

いたからだ。
背丈は一回りほど大きくなり、ゴツゴツとした甲殻類のような殻がアンダースーツ越しに見えていた。顔も派手な色の殻で覆われ、ヒゲのような突起が複数伸びていた。何より特徴的なのは肘から先が肥大化した腕と反射板のような見た目の楕円形の目であった。
個性：『シャコ』。シャコっぽいことは大概出来る。それが勝矢の今日の個性である。
勝矢はすぐさま近くにいた敵に近づよると、拳を振るう。
―シャコを知る上でまず思い浮かぶのはそのパンチ力だろう。その速さは海中でキャビテーションを起こす程に速く、力に至っては主食である貝の殻を叩き割り時には人間の爪を割るほどの威力をもつ。そしてその個性を持つ勝矢にもそのパンチ力は持っている。しかも当然ながら彼はシャコよりもはるかに大きい。
―何が言いたいかと言えば、今の彼のパンチは鍛えてるとは言え高校生にして楽に大人である敵を軽く吹き飛ばすほどの威力はあり、下手な増強系個性に勝るとも劣らない力を持っているのである。
だが、流石に全力で殴れば内臓が破裂するかも知らないのでいくらかは手加減はしている。とはいえ、相手の受け方によっては肋骨の一、二本は折れてるかもしれないが。
「ブベッ!!?」
「ガハァ!?!?」
「な、なんだこのエビやろ…ガッ!?!?」
「エビじゃねぇ！シャコだ！」
勝矢は次々に敵を殴り飛ばし、轟も残りの敵を凍結させていき、制圧していった。また、凍結させた一人から、彼らの襲撃の要が脳味噌剥き出しの大男である事を聞き出すことに成功した。
「なるほどな…最後に一つ言っておく……雄英舐めんな」
そういい勝矢は敵の腹を殴って気絶させた。
「真和須、何でそれがお気に入りなんだ？」
「見ての通り、強い個性の割には良く出てくるんだ。だからお気に入り」

「なるほど…そういや結局、葉隠はいなかったな」
「あぁ、多分他のエリアに「おーい！」あ、やっぱここに…＃@○☆▪⁉？」
　声が聞こえ、その方に振り向くと手袋の動きから、葉隠が手を振ってこちらに走り寄ってくるようであったが、勝矢は何故かすぐにそっぽを向いていた。
「二人とも凄かったねー！…？真和須くん、どうかしたの？」
「あ、いや～…えっと…」
　さて、シャコの特徴はパンチ以外にも、もう一つある。それは目である。
　シャコの目には12もの光受容体を持っており、紫外線や赤外線を見ることが出来ると言われている。人間の光受容体は三つなのでシャコは人間が見えないものまで見えるとの事である。
　…ここまで来れば察しはつくだろう。葉隠は個性によって透明人間となっている。しかしそれはあくまで『人間の視覚』での話である。個性よってシャコと同等の視覚を持っている勝矢には彼女の姿がはっきりと見えていたのだ。
　そして葉隠のコスチュームは手袋と靴のみであとは裸である。総括すると勝矢は『笑顔で手を振りながら駆け寄ってくるほぼ全裸の葉隠』を見てしまったのであった。
　黙ってあとでバレるよりはと勝矢は正直にその事を当たり障りのないように説明すると（当然顔は葉隠の方を向いていない）葉隠は初めは「ん？」となっていたが説明を理解すると同時にアワアワし始めた。
「えっ？見えてるって…え⁉？ホント…なの？」
「ホントでございます…まさか見えるとは思わなかった…腹切って詫びろってならそうするし、訴えられても文句は言わん」
「いやいや⁉？そこまでしなくていいよ！見えちゃう個性だってのは知らなかったわけだしさ、忘れてくれるのならそれでいいから…」
「本当か⁉？すまない…。それと、今俺が言うのもアレだが、見える個性の人もいるかもしれないし、何より怪我とかしたら大変だから、コ

スチュームは変えた方がいいと思うんだが…」
「ア、ハイ…肝に銘じておきます…」
「あー…その話はあとにして、今はみんなと合流した方が良くないか？例の大男もなんとかしねぇといけねぇし」
完全に蚊帳の外となっていた轟がそう告げると二人はハッとした様子を見せた。
「そうだった…！早くみんなのとこに行かなくては！」
「早く行こう！」
三人は土砂ゾーンをあとにし、中央エリアへと向かって行った。

Ｎｏ．６　ＵＳＪ襲撃（後編）

真和須たちが土砂ゾーンの敵を一掃し、合流しようと中央エリアでに向かっている頃、中央エリアは凄惨な現場となっていた。
イレイザーヘッドこと相澤が脳無と呼ばれた黒い大男の敵に腕をへし折られ、組み伏せられていた。イレイザーヘッド自身はすでに個性を使って脳無を見ているが、個性が使えなくとも圧倒的な力を有していた脳無の前では無意味であった。そしてその脳無に指示を出していた、手を大量に身につけている男も纏う雰囲気が各ゾーンにいた敵とは格段に違く、それを遠くから目撃していた緑谷、蛙吹、峰田の三人は愕然とし、どう打開すべきか考えていると、そこへ黒霧と呼ばれていたモヤ男が死柄木に近寄った。
「黒霧か、１３号は始末したのか？」
「申し訳ありません、死柄木弔。行動不能にはできたものの、散らし損ねた生徒がおりまして。１名、逃げられました」
「……は？」
その報告を聞いた死柄木と呼ばれた男はあからさまに不機嫌となり、唸りながら首をガリガリと掻いていた。
「黒霧ぃ…お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ…流石に何十人ものプロ相手じゃ敵わない、今回はゲームオーバーだ。帰ろっか」
その言葉を聞いた峰田は安堵するが、緑谷は急にあっさりと引き返す彼らの行動に不気味さを感じていた。その時だった。
「けどその前に、平和の象徴としての矜持を、少しでもへし折って帰ろう…!!？」
瞬間、凄まじい殺気を感じた緑谷たちが見たのはこちらに急接近し蛙吹の顔面に向けて掌を伸ばす死柄木の姿だった。
緑谷たちは死柄木の手が触れた瞬間に相澤の肘が崩れたのを見ている。つまりこのままでは蛙吹の顔が崩れ、絶命してしまう。緑谷がそれを防ごうと手を伸ばすが間に合いそうになく、もう少しで死柄木の手が蛙吹の顔を掴もうとした瞬間、５センチ大の石の破片が幾つか

飛来し、そのうちの二、三個が死柄木の手に当たり、思わず死柄木は手を引っ込めた。
「痛っ…何だぁ…？」
（あれは轟くん！それに葉隠さんと…え、誰⁉？…あ、あのコスは真和須くんか…って！そんな事考えてる場合じゃない⁉？）
やや離れたところにいる轟と葉隠を見たあと、シャコの姿をしている勝矢に動揺するがすぐに気持ちを切り替え、死柄木に向けて拳を振るった。
「ＳＭＡＳＨ！」
確かな手応えを感じたうえ、自身の腕が折れなかったのを見て力の制御が出来たと感じていた緑谷だったが、脳無が拳を受け止めていたに過ぎず、マズイと思った矢先、ＵＳＪ入り口から破壊音とともにオールマイトが現れた。
「もう大丈夫…私が来た⁉？」

時間は少し前に遡り、勝矢たちは相澤が脳無に組み伏せられるところを遠くから目撃していた。
「相澤先生が…⁉？」
「どうやらあれが本命だってのは嘘じゃねぇみてぇだな」
「とにかく、早く向かって手筈通り轟の氷で…⁉？マズイ！」
死柄木が緑谷たちの方に駆け寄ろうとしたのを見て勝矢は咄嗟に近くに転がってた大きめの石を前方に投げ飛ばすと、それを拳で打ち砕いた。
「オラァァ⁉？」
飛散した破片は死柄木に当たり、その後オールマイトが出て来たあたりで勝矢たちは駆け出した。
「よし、今のうちに行くぞ！」
「てか真和須くん今のすごくない⁉？練習してたの？」
「昔に遠距離対策としてある程度はね。石だから弾道が安定しないのが難点だけど当たって良かった」
オールマイトと脳無が殴り合いを始めてるなか、徐々に勝矢達は近

づいていく。そしてオールマイトは脳無にバックドロップを決めるが黒霧の策略により逆に拘束された。
　すると、緑谷が涙目になりながらオールマイトを助けようと駆け出した。それを阻もうと黒霧が迫るが―
「どけぇ！邪魔だデクゥ‼？」
　爆豪が駆けつけ、爆破でモヤを吹き飛ばすと黒霧の胴体を掴んで組み伏せる。それを見た勝矢は轟に合図する。
「今だ轟！」
「わかってる！」
　轟が個性を使い、脳無の半身を凍結させる。
「平和の象徴はてめえら如きにゃ殺れねえよ」
「全身モヤの物理無効人生なら『危ない』って発想すら出てこねぇよな‼？俺が『怪しい』って思ったら即座に爆破する‼？それと…誰だテメェはぁ‼？敵かァ‼？」
「落ち着けって爆豪！コスからみてアレ多分真和須だぜ？だよな？」
「正解だ切島。シャコの個性でこうなってる」
　そう話してる間にオールマイトは脳無の拘束から抜け出し、形勢逆転かと思われたが、脳無はなんと凍った自身の体を砕いて強引に立ち上がり、失った手足を再生させた。
「なっ‼？」
「残念だったな、こいつは『超再生』と『ショック吸収』を持った、対平和の象徴用に改造された超高性能サンドバッグ人間さ。それくらいで抑えられるものか。脳無、爆発小僧をやれ。出入り口奪還だ」
　脳無は瞬く間に爆豪に近づき、殴りかかろうとするが、オールマイトが彼を遠ざける事で事なきを得た。
　そこからさらにオールマイトが脳無に向けて両腕で凄まじいスピードのラッシュをかけた。
「《無効》ではなく《吸収》なら！限界があるんじゃあないか？私の１００％を耐えるなら、更に上からねじ伏せよう！ヒーローとは、常にピンチをブチ壊して行くもの！　ヴィランよ、こんな言葉を知ってるか…Ｐｌｕｓ（さらに）　Ｕｌｔｒａ（向こうへ）‼？」

そう言いながら放ったオールマイトの一撃は脳無に深く刺さり、ドームを突き破りはるか彼方に飛んで行った。チートが、と悪態をつく死柄木にオールマイトはクリアするとかいってたが、できるものならしてみろと威圧を込めて言い放つ。

それを聞き死柄木は後ずさるも、黒霧はある事を告げる。

「死柄木弔、落ち着いてください。よく見れば脳無に受けたダメージは確実に現れています。子供たちは棒立ち、あと数分もすれば増援は来るでしょうが、私たちで連携すれば充分に殺れるチャンスはあるかと」

「…そうだな、そうだよな。ラスボスが目の前にいるんだ、やるっきゃないな…！なにより、脳無の仇だ…‼？」

「オールマイトから離れろぉぉ‼？」

二人はオールマイトに襲い掛かろうとするが、彼の秘密を知る緑谷が両脚を犠牲にして両者の間に割って入る。無論、緑谷を迎撃しようと死柄木らは足を止め、緑谷に攻撃しようとするが、その手を銃弾が撃ち抜いた。

「…来たか‼？」

見るとそこには狙撃したスナイプを含めた大勢のプロヒーローがいた。流石に分が悪いと感じた死柄木は次こそは殺すとオールマイトに告げ、ワープゲートを広げ、消えていった。

今回の襲撃で負傷したのは、相澤、１３号、緑谷の三人であった。しかし、緑谷に至っては自身の個性の反動によるもののため、敵襲撃による生徒の負傷者はゼロであった。

なお、散り散りになった生徒たちが集合した際、中央エリアにいなかったメンバー全員に勝矢が「誰⁉？」と言われたのは言うまでもなかった。

教師達に促され、彼らは制服に着替え、教室で待機することとなった。

「真和須、その状態での制服あるんだ…」

「こういう時のために何着か用意してある。学校にも連絡済みだ」

「にしても、異形系の個性まであるんだな…そういやさ、前に動物番組で見たんだけどよ、シャコって人間には見えないもん見たんだろ？今どんなのが見えてんだ？」
「え⁉？ええと、どんなのって言ってもなぁ…上手く説明できないな。見え過ぎて、言葉じゃ言い表せないな」
　一瞬ばかり土砂ゾーンでの『事故』が脳内によぎり、少し上ずった声で上鳴の質問に答える勝矢だが、それを峰田は見逃さなかった。
「なぁ真和須よぉ、何で今声が変だったんだ？」
「い、いや…今、緊張が解けてな…」
「そういやお前、轟と葉隠と同じとこに居たって言ってたな…お前、葉隠の姿見えてんのか？」
「え”？」
「わわっ⁉？」
　勝矢だけならまだしも、葉隠もそれに反応してしまったことで決定的となり、峰田は血走った目で勝矢に詰め寄った。
「見えてんだな⁉？見えてんだよな⁉？っつーことはよ、葉隠のアレを見たんだろ⁉？それくらいは言葉で説明できんだろさぁ説明はよ⁉？」
「いや、それは…」
「何だ⁉？この場はダメか⁉？ならあとでオイラにだけ教えてくれよ！せめて色くらいは教エロよ葉隠のちｋ　―」
　瞬間、蛙吹から放たれた舌ビンタがスパァァァン⁉？と派手な音を立てて峰田は地に伏せるがトドメとばかりに耳郎のイヤホンジャックが突き刺さり、断末魔を上げて峰田は気絶した。
「峰田ちゃん、色々とダメよ」
「…サイッテー。で、真和須。その辺は葉隠と話し合ったの？」
「ハイ、口外せず忘れることで手打ちという事に」
「ふぅん。葉隠はそれでいいの？」
「うん…あれは事故みたいなものだし、真和須くんもわざとじゃないから。これを期にあとでコスチューム変えるつもり。だから、あまり責めないであげて？」

「…ならウチからは何も言わないよ」
「ありがとうございます耳郎様…！おかげで高校生活が死なずに済みました…！」
「んな大げさ…でもないか、うん」
　そんな一幕があったものの、ＵＳＪ襲撃事件は幕を下ろしたのであった。

Ｎｏ．７　体育祭に向けて

臨時休校を終え、教室に集まった一同に相澤がいつもの調子で教室に入ってきた。とはいえ、全身包帯まみれの格好ではあったが。
「俺の怪我はいい…それより、まだ戦いは終わってねぇ…」
「え？」
「まさかまた敵が…？」
その言葉に一同は緊張する。そして相澤が話した事は…
「雄英体育祭が迫ってる」
『クソ学校っぽいのキターー‼？』
「ちょ、ヴィランに襲撃されたばかりなのに大丈夫なんですか？」
「逆に開催する事で、こちらの危機管理体制が盤石という事を示すって考えだ。警備も例年の五倍に増やすらしいし、何より雄英体育祭は最大のチャンス、ヴィランごときで中止していいイベントじゃない」
そう、雄英体育祭はかつてのオリンピックに代わるビッグイベント。内容は全国に放送され、それはもちろんプロヒーローも視聴する。その活躍からスカウトする事が多い故に彼らにとっては将来に向けての大きなチャンスである。
「開催まで2週間ある。より多くの活躍ができるようにやれることはやっておけ。いいな」
『はい‼？』
そして時間が過ぎ、昼休み。麗日がやけに気合が入っており、周りに気合を入れてくなか、勝矢は切島に話しかけた。
「なぁ切島。今日放課後空いてるか？」
「ん？空いてるが…どうしたんだ？」
「いやな、さっきガチャったら『硬化』が出てな。ちょうどいいから放課後トレーニングルーム借りて前に言ってた応用を訓練がてら教えようと思うんだが、どうだ？」
「おお‼？そういう事なら頼む！」
「わかった。あとは緑谷を誘えればいいんだが…今はいないか。なら、あとで聞いてみるか」

その後、戻ってきた緑谷に訓練を持ちかけたところ、喜んで同行するとの事である。
さて、再び時間が飛び、放課後の教室の扉には大勢の人だかりが出来ていた。おそらくヴィランと戦ったこちらの様子を敵情視察を兼ねて見にきたのだろう。
「敵情視察なんざ意味ねぇからどけモブ共」
「とりあえず知らない人をモブっていうのはやめたまえ！失礼だろう⁉？」
飯田が爆豪の暴言を諌めていると、一人の男子生徒が近づいてきた。
「どんなものか見てみたけど、随分と偉そうだなぁ。ヒーロー科ってこんなのばっかなの？ちょっと幻滅するなぁ」
「待て、こいつ以外のみんなの顔よく見てみろ。こいつみたいなこと言うような顔に見えるか？同列に見られるのは勘弁願いたい」
「オイコラどういう意味だクソガチャ野郎‼？」
「……確かに、そうは見えないな。それは悪かった」
「てめぇも納得してんじゃねぇよ…！」
「まぁこいつの暴言もアレだったからな。そう見られても仕方がないかもしれないが」
無視すんなや‼？と叫ぶ爆豪を他所に先程の男子生徒は言葉を続けた。
「普通科でも体育祭のリザルトによっちゃヒーロー科へと編入も検討されるって知ってた？もちろんその逆もある。敵情視察？少なくとも俺は調子のってっと足元ゴッソリ掬っちゃうぞって宣戦布告に来たつもり」
不敵に宣言するその男子生徒に続いて、別の男子生徒が人垣から現れた。
「隣のB組のモンだけどよぅ！敵と戦ったっつうから見にきたんだけどよ、エラく調子づいてんなオイ！本番で恥ずかしいことになんぞ…って、ん？」
「どうした？」

「いや…敵を殴り飛ばしたエビ男ってのが居ないが、休みか？」
〔エビ男って…〕
　その男子生徒の言葉に一同が苦笑いを浮かべるなか、勝矢が手を上げた。
「あー…それ俺だ。あとエビじゃなくてシャコな」
「は⁉？どういうこった？」
「俺は『ガチャ』っていう個性でな、その日によって個性が決まるんだ」
「へぇ～…はっ‼？とにかく！あんま調子乗ってっとあとが恥ずかしいからな！」
　そういい男子生徒は立ち去るが、爆豪はそれに興味がなさそうに人垣を強引に分けて帰ろうとする。
「…オイ待てコラどうしてくれんだ⁉？お前のせいでヘイト集まりまくってんじゃねぇーか‼？」
「関係ねぇよ…　上に上がりゃ、関係ねえ」
　そう告げて爆豪はそのまま帰って行き、切島や常闇、砂藤がその言葉に流されそうになるところを上鳴がなだめたところで勝矢は切島に声をかける。
「切島、さっさとトレーニングルーム行くぞ。緑谷も」
「おお！そうだったな！」
「うん、早く行かないと時間になっちゃうからね」

　三人はトレーニングルームに集まり、勝矢がまず話を始めた。
「まず言っておくが、二人の個性は身体を強化するといった点ではよく似ている。それが全身か一部の違いなんだが…切島の『硬化』はこういう応用も出来る」
　そう言い勝矢は硬化を発動。全身を硬くし、さあ応用を始めるといったところで切島が勝矢に対し驚いていた。
「オイオイ真和須⁉？今まで『硬化』何回出た⁉？」
「え？5回くらいだと思うが…」
「マジかよ…今の俺くらいの硬度になってるぞ⁉？俺ですら今まで伸ばしてこれくらいなのに…」

「え?・そうなのか?・」
「……もしかして、一日しか使えない代わりに個性の伸びが恐ろしく早いんじゃないかな?他に個性が被った子とかで気づかなかったの?・」
　緑谷の仮説に勝矢はあー、と頬を軽く掻いていた。
「いたにはいたが、才能マンな奴だったから殆ど同じくらいだったからな～。まぁいい、自分の個性についてまた新しく知れたよ。ありがとう」
「い、いや、僕は何となく思ったこと言っただけだし…」
「でもそれで俺は新しく気づけた。謙遜する必要はないだろ?それで、話を戻すが、硬化の応用だが…見てろよ」
　勝矢は右の拳に力を込める。すると、ビキビキィッ!と音を立てその部分が刺々しく硬くなりそこ以外の硬化が薄くなった。
「おお⁉?何だそれ⁉?」
「集中強化と俺は呼んでる。全身に守りがいかなくなるが威力はかなりあがるぞ。あとはこれを応用して攻撃される箇所を集中強化して防ぐとか、攻撃の瞬間だけ硬くして悟らさないようにするとかだな」
「なるほどな～やってみるわ!」
　切島がいざ実践しようと集中してみるが、ほんの少ししか保てずすぐに解除してしまう。
「だ～!思ったより集中力いるなこれ!」
「慣れればすぐに出来るさ。それで緑谷、全身を強化する切島が一部の強化ができた……つまり、これがどうゆう事かわかるよな?」
「…ッ‼?そうか、全身に纏えばすぐに攻撃ができるし身体機能も少しは上がる。でも１００％だと全身が壊れるから僕が制御できるギリギリの力でやれば制御に気を回さずに済む…」
　緑谷はブツブツと呟き続け、それを忘れないようにメモを取っていく。そして何かを閃いた緑谷は立ち上がった。
「全身に、熱をッ!伝えるイメージで……!」
（…あれは…?）
　そういいながら緑谷は全身に力を込める。すると、緑谷の全身から

薄緑色のスパークが迸った。だがすぐにそれは解け、緑谷は反動で倒れた。
「うわっ⁉?」
「大丈夫か緑谷?」
「う、うん、平気かな…でも、これが上手く扱えればだいぶやることが増えると思う!ありがとう!真和須くん、アドバイスくれて!!」
テンションが非常に上がった緑谷が勝矢に近づいて礼を言ってくる。
「おう、俺はヒントをやっただけだし気にするな…あと、二人の訓練内容は決まったな。切島は部分硬化の、緑谷は全身に個性を纏わせる事の体得だな」
「「おう（うん）‼?」」
3人はトレーニングを始め、時折勝矢と切島で組み手を行ったり、緑谷は個性の制御を行いながらの組み手をし、対人での制御の仕方を覚えていった。

時間が経ち、下校時間となり3人はトレーニングルームをあとにした。
「じゃあな真和須‼?また明日な!お前から教わったアレ、早く身につけてみせるぜ!」
「あぁ。緑谷もそれ、早く身につけるといいな」
「うん、頑張ってみるよ」
その後、勝矢は帰宅し自室にある今まで出てきた個性を纏めた資料を漁っていた。
(緑谷の出したあの光…見覚えがあるんだよな…いや、気のせいか?まぁいい。調べるのはあとにしてもう寝るか…)

Ｎｏ．８　体育祭前トレーニング―１

２日経ち、午前の授業が終わり食事を終えて教室にいた時勝矢は切島に話しかけられた。
「真和須！あれから自分で練習してみたらよ、だいぶ部分強化ってやつモノに出来るようになってきたんだ！」
「おぉ、よかったじゃないか。なら、部分強化の感覚を全身に広げるような感じでいけば少しは硬化の強度が増すはずだ。強度が増せば部分強化がさらに強くなって、その感覚をまた全身に…てな感じで少しずつ強くなる」
「おおぉ…！そんな鍛え方があったのか‼？俺じゃ考えつかなかったわ、ありがとな真和須！」
「まぁそのやり方だと本当に少しだけだがな。本当は自分殴るか硬いもんに身体ぶつける方が早いが、それだと周りの事も考える必要がある。俺が言ったやり方なら自分の部屋でも比較的静かに出来るメリットもある。さらに、お前は俺と違っていつでも個性使えるからそれだけでもだいぶ変わると思うぞ」
「なるほどな…そういや緑谷の方はどうだ？アレ上手くいってるのか？」
「うん、少しずつだけど保ってられる時間も増えたし、あの状態で動き回れるようにはなってきてるよ」
　切島と緑谷がそれぞれの成果を話していると、話を聞きつけた麗日と飯田が近づいてきた。
「なになに？３人特訓しとるん？」
「おう！真和須のアドバイスで俺と緑谷、新しい個性の使い方身につけられたぜ！違う視点のアドバイスって結構役に立つんだなって思ったぜ」
「なるほど、同じ個性を持っても使い方が同じとは限らないか…真和須君、今日空いていれば、放課後に俺と特訓をして貰えないか？」
「それは構わないが…」
「ならウチも頼めるかな？」

すると、八百万が彼らのもとにやってきた。
「あの、良ければ私もいいでしょうか？同系統の個性を持ってる方がいなくて、他にどういう使い道があるか知りたくて…」
それを皮切りに何名かのクラスメイトが自分も教えて欲しいと名乗り出てきた。流石にそれだけの数は教えきれないので、勝矢はまぁまぁと手を出した。
「ちょっと今日は早めに帰る関係で一人しか教えられないから、ジャンケンか何かで誰が教わるか決めてくれないかな？」
勝矢の提案にクラスメイト達は乗り、彼らを円になりジャンケンの準備をする。
『じゃーんけーん…』
一回で決まるわけもなく、勝ち残った者同士でどんどんジャンケンを行なっていき、最終的に勝ち残ったのは…
「では、よろしくお願いしますね、真和須さん」
「よろしく、八百万さん」
「あーあ、グー出せば良かった…」
「八百万と二人きりで手取り足取りだと…⁉？チクショウ真和須め…！」
残念そうにしている耳郎の傍らで峰田が別の意味で恨めしそうな視線を二人に向けていると、上鳴がこんなことを言い出した。
「そういやよ、真和須ってどこで個性の訓練してんだ？個性によっちゃ家で出来ないようなのもあるだろ？」
「あー…何処でというと…家の……山で」
『家の山⁉？』
聞き慣れない言葉にクラスメイトが驚愕し、緑谷が恐る恐る勝矢に尋ねてみた。
「えっと…真和須くん、失礼だと思うけど、君の両親って何やってるの…？」
「父さんが陶芸家で、真和須轆轤（ろくろ）って調べれば出てくるはず。山はその関係で。母さんは触ったものを回転させる『回転』の個性持ちの普通の主婦」

そう勝矢が答えると、ケータイで先程の名前を調べていた瀬呂が目を見開いていた。
「真和須轆轤って…国宝級の腕を持つ超一流の陶芸家じゃねぇか⁉？えっと、最近美術館に出展させた壺の価値が…二千万⁉？」
『はぁ⁉？』
「もしかして、真和須くん…坊ちゃん？」
「そう言われるのあんま好きじゃないけどな…」
「色んな個性を使えてるのはそういうことか…ん？てことは真和須の個性は父親譲りか？」
切島の質問に勝矢はいいや、と首を振る。
「父さんは『無個性』だよ。俺のは突然変異ってやつ。まぁそのせいで母さん親戚から浮気を疑われたらしいけどね…」
『……』
何処となく闇を醸し出した勝矢にクラスメイト達は気まずい顔をしていた。
「まぁ父さんは微塵も疑ってなかったし、鑑定もしたから疑いは晴れたけど。あと母さんと似た個性持った妹が産まれたのもあるけどね」
「妹がいるんだ？」
「あぁ。機会があれば紹介するよ」

そして時間は流れ放課後、トレーニングルームにて勝矢と八百万は向かうっていた。
「八百万さんに関しては、戦術面でやれる事を増やす事だな。個性が使える時間が長い分、創れるものの種類は俺よりかなり多いし、バイクや万力といったものまで創れるなら大したものだよ」
「いえ、それほどでも…そういえば、ガチャで出た真和須さんの個性は日付が変わったら使えなくなる感じですか？」
「そう。だから『創造』みたいにまともに扱うのに試行錯誤が必要なやつだと扱い慣れる頃に日が変わるってのがしょっちゅうだな。まずは八百万さんの戦闘スタイルからどうアドバイスするか決める。とりあえずガチャ回すから、向こう向いてて貰えるか？相手の個性がわ

からない前提での戦い方を見たいし」
　わかりましたわ、と八百万がこちらに背を向けている間に勝矢はガチャマシンを出し、ガチャを回し始めた。出てきたカプセルを割って中身を確かめた。
（ふむ…これか。あ、『印付き』か…ま、平気か）
　勝矢は八百万にこちらを向くように伝えたあと、財布からコインを一枚取り出した。
「じゃあこのコインを弾いて、落ちたら始めようか」
「了解しましたわ」
　勝矢はコインを爪で弾き、コインは宙に舞い地面に向かって落ちていく。
（まずは盾を創って様子をみましょう…）
　そう考えた八百万は盾を創るイメージを固める。
　そしてコインは地面に落ち、盾を創り始めた途端…『勝矢の右肘から先が勢いよく飛んできた』。
「え？…うッ‼？」
　出来た盾を使う間も無く、飛んできた右腕は弧を描いて八百万の左脇に突き刺さり、八百万はよろけた。すぐに飛んできた腕は勝矢のもとに戻り再びくっつき、今度は両腕を飛ばしてきた。
（腕を飛ばす個性⁉？なら、ネットで腕を絡めて…いいえ、ネットじゃ軽くて勢いを殺せない…ここは防ぐしかありません！）
　そう考え八百万は盾を構えて飛んできた腕を受け止める。かなりの衝撃がきたがなんとか防ぐことはでき、勝矢本人が近寄ってくる可能性を考えて勝矢の方を向いた。
「ヒャッ⁉？」
　八百万が見たのは『頭だけを飛ばして』こちらに来る勝矢であった。その光景に思わず驚くがすぐに盾を構えて頭突きを防ぐ。が、すぐに胴体が追いついてきて腕と頭を戻すと盾に蹴りを入れ、同時に今度は足を飛ばしてきた。
　二度続けての衝撃に耐えきれず、八百万は倒れ込み、勝敗は決した。勝矢は足を戻しながら八百万に言葉をかける。

「あーやっぱ痛っ…これで決着でいいかい？」
「え、ええ…あの、今日の真和須さんの個性は一体…？」
『ロケットボディ』。手足と首を発射できる。スピードと追尾がそこそこあるけど、くっつける時痛いのが欠点。具体的には麻酔無しで歯を引っこ抜かれる感じ」
「え？それ、大丈夫なんですの？」
「昔はもっと痛かったし、慣れた感じかな。使えば使うほど関節単位で細かく部位を飛ばせるし、痛みは減ってくるみたいだし」
　ちなみに始めの頃の痛みは尋常でなく、例えるならキン〇マを強くデコピンされたようなものだったが、流石に女子である八百万の前では言うわけにもいかなかった。
「八百万さんさ…まずは盾を創って様子見ってスタンス取ってるね？悪くはないけどさっきみたいに速攻で決めてくる相手には不利だ。盾を創る前にやられるからね」
「はい、それはよくわかりましたわ…あの場合、どうすれば良かったか教えてもらえませんか？」
「盾じゃなくて別で早く創れるものを出して牽制させるのがいい。丸めた状態の投網とか手から創れるならそれがベスト。広範囲にいくし、上手く被されば動きを止められる」
「なるほど…ですが、轟さんのような範囲攻撃を持ってる相手だと、投網ごと攻撃される気がしますが？」
　その質問に、勝矢はニヤリと笑いこう答える。
「まぁそうだな、ただの投網だし。だけど…『それが本当にただの投網か』は八百万さん自身しか知らないわけだ。だから、迎撃しようとしたら相手にさりげなく、だけどわかりやすく『相手が自分の策にはまった』ような顔を浮かべるといい。すると、それを見た相手はどう思う？」
「…っ！投網に何か仕掛けがあると思って避けざるを得なくなる…！」
「その通り。そうやって避けてる間にまた別のものを創って仕掛けられる。こうやればどんどん相手を自分のペースに引き込められる。

そして何回もブラフをやれば相手はブラフとわかって出したそれに構わず攻撃してくる。そのタイミングで本当に仕掛け付きのものを出せばまんまと引っ掛かる」

勝矢のアドバイスに八百万は天啓を得たかのような顔をし、すぐさまメモとペンを創って記入し始めた。

「そういう考えはありませんでした…！早速実践してみますわ。教えていただきありがとうございます」

「いやいや、力になれて何よりだよ。あと、創るものは既存品でなくとも、自分なりのアレンジを入れても良いかもしれない。そうそう、ハッタリで動きを封じるやり方にこういう手がある…」

そう言い勝矢はある方法を伝えた。

「……！確かにそれは有効ですわね」

「使える相手は限られてるけどだいぶ有効だ。…時間的にそろそろ終わりにするけど、大丈夫か？」

「ええ、だいぶ勉強になりましたわ」

じゃあまた明日、と勝矢は荷物を纏め下校していった。

帰宅後、勝矢は明日以降のことを考えていた。

（この様子だと、他のみんなから教えを請われるな…。今のうちにどういうアドバイスをしたらいいか考えおくか）

勝矢はノートを取り出してアドバイス法を書き始めていき、ある程度纏めたところで切り上げ、眠りについたのであった。

Ｎｏ．９　体育祭前・戦闘訓練（前編）

体育祭を控えているとは言え、普通に授業自体はありそれはヒーロー基礎学も同様である。今回のヒーロー基礎学は戦闘訓練、内容は廃墟群に潜む敵の確保。しかし、敵は応援を呼ぶ可能性がある為迅速に敵のリーダーを確保し鎮圧するといったものである。ちなみに今回の教師はオールマイト、相澤、１３号である。

場所はＵＳＪの倒壊ゾーン、チームはヒーロー、ヴィランともに５人１チームで制限時間は２０分。ヴィランチームがエリアに入った１０分後にヒーローチームが入り両チーム共に確保テープを所持、ヒーローチームの勝利条件はヴィランチーム全員、もしくはリーダーの確保。ヴィランチームの勝利条件はタイムアップもしくはヒーローチームの確保である。

なおチーム分けはくじ引きで決め、ヴィランチームのリーダーには目印に腕章を付けることとなっている。すでに第一戦は終え、勝矢のいる第二戦が始まろうとしていた。ちなみにチーム分けは以下の通りである。

ヒーローチーム：　緑谷、飯田、上鳴、葉隠、蛙吹

ヴィランチーム：勝矢、芦戸、峰田、青山、瀬呂

「ヒーローチームバランスが良いな」

「パワー型の緑谷にフィジカルに富んだ飯田、中遠距離の上鳴に隠密の葉隠、それと何気に万能な梅雨ちゃん…確かにな～」

轟の呟きに切島が相槌を打つなか、耳郎がヴィランチームの見解を述べる。

「ヴィランチームは…拘束力の強い峰田と瀬呂に中遠距離に強い青山と芦戸、それに本人自身も何が出るか分からないが故に対策が取りづらい真和須か…」

「それで、肝心のリーダー役ですが…真和須さんでしょうね」

確かに、とその場にいたクラスメイトほぼ全員が八百万の意見に同意した。以前のトレーニング以降も、本人の予定が空いている時に何名か個性の訓練やアドバイスを受けたりしていた。また、普通に勉強

でわからないところを教えてもらっているがいずれにしても教え方が上手く、個性にしても学力にしても着実に伸びているのを各自実感していた。その経験から、リーダーに真和須が選ばれるだろうと確信していた。

「確か峰田は真和須のアドバイスでコスチューム会社に新しいサポートアイテム作って貰ってるんだっけ？」

「あの様子だと、まだ出来てないみたいだな。もぎもぎを飛ばす銃みたいなのらしいけど、よくそういう発想思いつくよな」

「然り。俺も真和須の助言で天空を制することが可能となった。彼の助言は金言に値する」

黒影（ダークシャドウ）は常に宙に浮いてるのなら、パワー次第で常闇を抱えて飛べるのでは？という真和須のアドバイスを受けて特訓した結果、常闇は低空ながら空を飛べることができるようになっていた。（ちなみにこれを本人は黒の堕天使と呼んでいる）第一戦では常闇がリーダー役を務め、飛び回って翻弄していたが、運悪く爆豪の放った爆撃による爆風でふらついたところを轟の氷で抑えられ、決着となった。なお、それにより手柄を取られたと爆豪が突っ掛かったのは言うまでもないだろう。

そうこうしてる内に、彼らの予想通りに真和須に腕章が渡された。

「あとは、真和須がどんな個性出すかか…」

「無個性」

「爆豪…」

さて、注目を集めている真和須はというと早速ガチャを回し始めた。すると出てきたのは虹色に輝くカプセルであった。

「おお⁉？コレ凄いやつなんじゃね⁉？」

「僕みたいに派手なカプセルだね☆」

「ん？真和須くんどうしたの？」

周りが湧き立つのと反対に、当の本人はうわぁ…みたいな顔をしていた。その理由はすぐに分かった。

カプセルを渋々割って出てきた紙に書かれていたのは…『無個性』

であった。
『はぁぁ⁉？』
「マジかよぉ⁉？アレ絶対確定みたいだったろ⁉？」
「詐欺だろこんなの！」
「無個性のカプセルはこれで決まってるの？」
「あぁ。でも待ってくれ、まだチャンスはある」
　どういう事？と、四人が首を傾げるとガチャマシンがガタガタと動き、ファンファーレが鳴りレバーの横にある『１３』の数字が１増えて『１４』に、その後さらにファンファーレが鳴ってその下の『４０／５０』の数字のうち、分母が１０減り『４０／４０』になったあと上の数字がさらに増えて『１５』になり、下の数字が変化して『０／２５』になった。
「おっ、ラッキー！両方変化したか」
「え？何これ？」
「まずこの数字だが、累計で下の数字の分母と同じ日数だけガチャを回さない、つまり個性を使わないと分子が溜まって、全部貯まると上の数字が１貯まる。そしてその数だけガチャをやり直せる。で、無個性がでると感覚だが６０％で『何も起きない』、２０％で『分母が１０減る』、１５％で『リセット権１増加』、５％で『両方』起きるってわけ。今回は５％の方だ。あと、数字が貯まったら次の分母はランダムで５の倍数に変更される」
　ちなみにだが、最大で出た分母は百であった。
「何それヤバくない⁉？」
「ん？そんな効果があったのなら、最初の戦闘訓練のときリセットすれば良かったんじゃないか？」
「実はな、出てきた紙に星印が付いてるとリセット出来ないんだ。あの時は印が付いてて出来なかったわけ」
「へぇ～そう上手くはいかないのか。とりあえずリセットしようぜ！」
　峰田に言われるまでもなく、勝矢は上の数字を叩いたあと再びガチャを回した。

「ん…これか。……よし、じゃあ作戦を決めようか」
「お、おぅ…何か、真和須さ…」
「ゴツくなったね☆」
「とりあえずどんな個性か教えて？じゃないと私たちどうすればわからないし…」
「あ、そうだったな。この個性は……といって、……が出来る。弱点は……だ。それで、作戦だが…」

１０分経ち、ヒーローチームが向かうなか、蛙吹は葉隠の手袋のデザインが少し変わってるのに気がついた。
「ケロ、透ちゃん手袋新しいのにしたの？」
「うん！あと見えてないけど服も作ってもらったんだ～私の髪の毛とかから作ってるから一緒に透明になる上に頑丈なんだって！」
「やっぱり、この前のＵＳＪの時の事がきっかけかしら？」
「う、うん…あのあと、よくよく考えたら怪我とかしたら危ないし、街の人とかにあの時の真和須くんみたいに『見えちゃう』個性の人とかいたら恥ずかしいってなってね…でも全部透明だと寂しいから手袋と靴はデザインだけ変えた感じにしたんだ」
「二人とも、今は授業だからお喋りはここまでにしよう！」
　飯田の言葉で二人は喋るのをやめ、先に進んでいく。やがて廃墟群が見えてきたあたりで、一つの廃墟の屋上に人影が見えた。その人物を見て５人は目を剥いた。
「あれは…真和須くん⁉？それに青山くんも…」
「腕章からしてリーダーはやはり真和須君か…だがあの姿は…？」
「ターミ〇ーターじゃね？どんな個性かわからないけど、あいつが持ってるのはヤバくないか…⁉？」
　勝矢が出した個性は『サイボーグ』。その名の通り身体がサイボーグ化（見た目はターミ〇ーターのＴ―８００）になり、防御力をはじめとした身体能力の向上に加え、胴体と四肢から武器を出せる個性である。そして今彼が腰だめに構えているのは『ミニガン』であった。
「マズイ…みんな避けて‼？」

緑谷が叫ぶと同時に、ビィィィィッ‼?と布を裂くような音が聞こえ、緑谷達からみて右からトリモチ弾による弾幕が迫ってきた。慌てて緑谷達は左に駆け出し、ちょうど良い隠れ場所を見つけそこに行こうとした時、緑谷は違和感を感じた。
(…ん?…あそこだけ微妙に地面の色が違う…?まさか⁉?)
「みんな、そこに行っちゃダメだ!これは罠だ!」
「え?」
緑谷の言葉を聞くも、止まりきれなかった飯田がその隠れ場所に足を踏み込んだ瞬間、ズルリと地面が滑り飯田は後ろに転んでしまう。
「なっ⁉?…まさか、芦戸君の酸でぬかるみを作ったのか⁉?」
「今だぁぁぁあ‼?」
その隙を突き、物陰に隠れていた峰田が飛び出してもぎもぎを投げつける。投げられてもぎもぎは飯田の全身に引っ付き、飯田の動きを封じた。
「ぐっ…‼?」
「よし!瀬呂、回収頼む‼?」
「おう!」
峰田の合図で廃墟内にいた瀬呂はテープを射出し、峰田がそれを捕まえると巻き取って回収し始めた。その様子をカメラで見ていた待機組は感嘆の声を上げていた。
『おお‼?』
「真和須の個性で出したミニガンで誘導させて、隠れ場所にぬかるみの罠を仕掛けて嵌ったところで峰田のもぎもぎで拘束後に瀬呂が回収する…短時間でよく考えたな」
「ですが、かなり自然に作ったにも関わらずそれを罠と見抜いた緑谷さんも中々ですわ」
推薦組二人の言葉に教師陣は補足を加えていく。
「確かにそうだ。だがさらに言うなら、青山を近くに配置させたのは、万が一罠と違うところに向かった場合に牽制させるためと見ていいだろう」
「それと、すぐに撤退させたのは無理に確保しようとして罠にかから

なかったメンバーに返り討ちに遭うのを防ぐためですね。引き際がよく分かってます」
そう話してるうちに、もう少しで峰田が回収されといったところで何かが飛来して峰田を拐っていった。
それは、全身に薄緑色のスパークを迸らせた緑谷であった。
「よしッ！捕まえた！」
（ワンフォーオール・フルカウル…まだ５％だけど、扱えるようになってきた！）
緑谷がフルカウルと名付けたこの形態、初めは少し保つだけでやっとだったが、個人的に訓練した結果だいぶ扱えるようになり、高速移動や短距離飛行を可能としていた。その様子を見ていた勝矢は薄い笑みを浮かべた。
（あそこまでいけるとは、教え甲斐があったな。こっちは一人確保されたが、向こうも事実上一人確保状態…さぁ、どう出るかな？）

Ｎｏ．１０　体育祭前・戦闘訓練（後編）

『跳んだあぁぁぁ⁉？』
　モニタールームでは緑谷の変化に驚きの声を上げるものが何人かいた。
「もう骨折克服したのかよ⁉？」
「おぉ、緑谷うまくアレ制御できるようになったのか！」
「切島知ってるのか？」
「前に真和須と俺とで特訓した時に真和須のアドバイスを聞いて思いついたみたいでよ、あン時は一瞬だけだったけどだいぶ伸びたな～」
「…っ⁉？」
　切島の言葉を聞いて爆豪は目を剥いて驚いていた。緑谷が人から個性を貰ったことは本人から聞いているが、碌に扱えず使えばかならず骨を折っていたため完全に個性を扱えてる自分よりは下と見ていたのに短い期間で制御出来るようになっていたのもあるが、その切っ掛けを与えたのが『場合によっては没個性になりうる運任せ野郎』と見ていた勝矢だということが大きかった。
（デクまでも先に進ませるなんて…聞けば他の奴らもあいつの言葉を聞いて個性を伸ばしてやがる…！）
　プライドが高い爆豪は自分の個性の事は自分でわかってるから他人に意見されたくないとして勝矢からのアドバイスを受けずにいたが、こうも周りが強くなっていくのを見て、アドバイスを受けることを密かに考えていた。
（あいつからアドバイスを受ければ、デクと条件は同じになる…同じ条件なら、デクとの差は埋まらない筈だ…！）

　一度着地し、峰田に確保テープを巻いた緑谷は瀬呂がいた方向を見るが、すでに撤退したらしく、気配は無かった。その後、緑谷は飯田のところに向かったが、やはり飯田は身動きが取れずにいた。その時、相澤から連絡が入ってきた。
《飯田、脱出が無理なら確保扱いにするが、どうだ？》

「くっ…悔しいですが、それで構いません…!!?」
　事実、飯田は地面と身体がもぎもぎでくっ付いているばかりか、ふくらはぎの排気筒まで塞がれていたためどうにも出来ずにいた。
《わかった…峰田、飯田。確保だ》
「すまない緑谷君…こんなあっさり捕まってしまって…」
「いや、僕ももっと早く気づいてれば良かった…あとは任せて」
「真和須ちゃん達は中に入っていったわ。屋内戦になりそうね」
「わかった。とりあえず、中にも同じような罠があるかもしれないから、気をつけて行こう」
　一方、勝矢達はインカムで連絡を取り合っていた。
《どうする真和須？峰田確保されたぞ!?？》
「正直、緑谷の成長は思ってた以上だった。だが慌てるな、とりあえず手筈通り瀬呂は芦戸さんと合流、その前に接敵したらテープで足止めしながら合流を目指してくれ」
《了解！》
「さて…出来れば上鳴とは戦いたくはないが…」
「確か、弱点は電気浴びると気絶しちゃうんだよね？」
「あぁ。まぁ一応の対策はしてるが、会わないに越したことはない。青山、サポートは頼む」
「任せて☆」
　勝矢のいる廃墟に侵入した緑谷たちは上鳴と蛙吹、緑谷と葉隠の二組に分かれて罠に警戒しつつ、ヴィランチームを探していた。上鳴組が四階に上がり右を向いた瞬間、廊下の奥に立っていた青山が自身の個性によるレーザーを上鳴に向かって発射してきた。
「おわっ!!？」
　間一髪で回避に成功するが、2射3射と続けて放たれ二人は身を隠した。
「こういう直線的なとこだと青山ちゃんが有利ね」
「でも青山は撃ち過ぎると腹痛を起こすから、そろそろ攻撃が収まるはず…」
　予想通り、すぐにレーザーは止み、反撃を加えようと上鳴が飛び出

したがそこにいたのはショットガンを構えた勝矢であった。どうやらワザとレーザーを止めさせて誘い込んで返り討ちにするつもりらしい。

引き金を引き、トリモチの散弾が襲い掛かるが咄嗟に蛙吹が舌で上鳴を掴んで引き寄せたため被弾は免れた。

「上鳴ちゃん、迂闊に出るのは危険よ」

「おぅ…サンキュー梅雨ちゃん…つーかどうするよ？このままだと真和須に追い詰められるぞ？」

「上鳴ちゃんは帯電したまま前に出て、真和須ちゃんが撃つと同時に放電すれば弾を撃ち落とせるんじゃないかしら？あとはそのまま迎撃すれば弾は尽きるはずよ」

「あ、そうか！やってみるわ！」

三階

「緑谷くん、今の音って…」

「うん、多分真和須くんは上の階にいるみたいだね。でも…」

上の階の銃声を聞き、すぐにでも応援に向かいたい緑谷たちであるが、窓際の廊下で芦戸と瀬呂に挟み撃ちにされていた。

（どうする⁉？二人の個性的に迂闊に近寄ると危険だし、フルカウルも慣れたばかりで狭いところでの動きに不安がある…。っ！そうだ…）

「葉隠さん、窓際から離れてて。あと…」

緑谷はある策を葉隠に告げる。それを聞いた葉隠はサムズアップで答えた。

（ん？あの二人、何する気だ…？）

瀬呂が二人のやりとりに疑問を抱いていると緑谷は拳に力を込め、窓際の壁を殴りつけると同時に、葉隠は手袋とブーツを投げ捨てた。

廃墟ということもあり、壁は簡単に崩れて人1人が通れる穴が空いた。

「っ⁉？マズイ！」

緑谷の意図に気付いた瀬呂がテープを伸ばすも間に合わず、緑谷は

フルカウルを発動、穴を潜って外に出ると壁を蹴って上へ跳んでいった。
「しまった…!!?緑谷が跳べるのを忘れてた…「きゃあ!」芦戸?」
芦戸の叫び声を聞いてその方を見てみると、芦戸は確保テープに巻かれていた。緑谷に気を取られた隙に持っている確保テープを除いて透明になった葉隠に捕まったようである。
「悪い真和須!緑谷がそっちに「てぇりゃあぁぁ!!?」おわっ!!?」
勝矢に連絡しようとした隙をついて葉隠が接近、瀬呂の確保テープを奪うとそのまま瀬呂に巻きつけて確保した。
「よし!一丁あがり!」
「クッソ〜」
一方で緑谷は4階に着き窓を蹴破って突入する。すると…
『ヒーローチーム、WIN!!?』
「っ!上鳴くんたち、真和須くんを捕まえられたんだ…」
オールマイトの放送に緑谷は安堵し、上鳴たちのもとに向かう。合流した緑谷が見たのは、容量オーバーしアホ面になって確保されている上鳴、何故か困惑している蛙吹、そして蛙吹に取り押さえられているのは勝矢と同じコスチュームをした少女であった。
「へぁ!!?え?この子は…?あ、もしかして…真和須くん!!?」
「うん…正解…」
そう答える勝矢(♀)の声も見た目相応の可愛らしいものとなっていた。
「えっと…何があったの…?」

時は遡り、上鳴はいつでも個性を発動出来るよう帯電させ前に躍り出た。
上鳴の状態を見て少し焦りを見せて勝矢はすぐにショットガンを撃つが、撃つ前に構えた時点で上鳴は放電させる。発射されたトリモチ散弾は電撃に触れ、トリモチは焼き焦げて地面に落ちていった。
「おっし!いける!」
「チッ!」

距離を詰めていく上鳴に勝矢はスピンコックという技法で次弾を装填し再び撃つがやはり放電により撃ち落とされていた。
やがて放電の範囲内に入りそうなときに、勝矢はショットガン本体を投げつけ、逃走した。
（ん？もしかして…電気が弱点か？なら俺超有利じゃん‼？）
そう考えた上鳴は追いかけようとする。しかし、青山がそれを阻んだ。
「行かせないよ☆」
「ヤベッ⁉？」
青山がレーザーを放とうとしたとき、あとから来た蛙吹が追いつき、青山に舌による刺突を加えた。青山はのけぞり、それによってあらぬ方向にレーザーは飛んでいき、その後蛙吹に取り押さえられ確保された。
「上鳴ちゃん。先に行ってて。あとで行くわ」
「任せろ！」
上鳴は勝矢を追いかけて行き、やがて行き止まりに着いた。
「よーし、いくぜ‼？無差別放電…」
（えぇい！一か八かだ、もう一度リセットを…！）
勝矢はすぐさまガチャマシンを出してリセットさせる。そしてカプセルを割ったところで…
「１３０万Ｖ（ボルト）オォ‼？」
上鳴の技が炸裂し勝矢は電撃を全身に浴びた。
「よっしゃぁ…って、は⁉？え？真和須…な、何だその姿⁉？」
「痛（いった）ぁ…前の個性だったら即気絶だったな…これはこれでアレだけど」
個性で腕を変化させながら話している勝矢だが、姿どころか性別すら変わっていた。
青に近い紺色の髪はウェーブががった薄桜色のセミロングに、パッチリしたピンクの瞳、身体つきも女性らしい丸みを帯びた身体となり、胸にはしっかりとした実りがあった。そして何より特徴的なのは、頭から伸びた一対の触覚と腰から伸びてる薄桜色の細長い『虫特

有の腹』、先ほど変化させたこれまた薄桜色の『鎌状の腕』であった。
個性：『ハナカマキリ』。ハナカマキリのような見た目になり、腕を鎌状にしたりハナカマキリっぽいことが可能となる個性である。
すぐさま勝矢は上鳴に斬りかかってくるが上鳴は勝矢の変化に戸惑いを隠せず、半ばパニックとなり個性を連発した結果、容量オーバーでアホになりそのまま確保。しかし最後の電撃が当たっており、先の電撃でのダメージもありふらついたところを蛙吹に確保されたのであった。

以上の事を待機組含めた全員に説明すると、緑谷が恐らく全員が気になっていた質問をした。
「えっと…何で、ハナカマキリで女の子に？」
「ハナカマキリだけじゃなく、カマキリはだいたいメスの方が身体が大きいからその影響だと思う。これ以外にも性別が変わる個性は幾つかあるよ」
「そ、そうなんだ…」
勝矢の言葉にある程度納得している緑谷だが、若干ながら照れていた。緑谷だけでなく、何名かのクラスメイトたちも似たような反応だった。
というのも、勝矢のコスチュームは身体にピッチリつくタイプのものなので身体のラインがハッキリわかるのが原因であった。
「あ、それと相澤先生。こんななので、着替えは男子が出た後で良いですか？」
「あぁ、構わん。流石に一緒に着替えろとまでは言わん」
着替えという単語を聞き、峰田は血走った目で勝矢に近づいた。
「なあ！勝矢…今お前…ノーブラってことか⁉？」
『⁉？』
「まぁ、そうなるね…」
「ひょー‼？…先生！ここは合理的に一緒に”っ」
いっそ清々しい顔で提案しようとした峰田だが、見かねた切島の一撃でノックアウトされた。

「お前…色々とダメだろ…」
「ナイスだ切島」
「そういや真和須、女性用下着持ってるの？」
「うん。こういう時のために用意してある。無論学校にも連絡済みだし、何なら個性届けにも書いてある。性別変わる個性は体格一緒だからわざわざサイズ違い用意しなくて良いのが救いだね」
「へぇ…何でウチよりあるの…」
自身の胸と見比べながら耳郎はそう呟いた。
その後、無事に制服に着替え終えた勝矢は教室に戻って行った。
「制服も女子用なんだね」
「いくら雄英が自由な校風でも制服は男女別にしているから、事情はわかるが制服は変えてって言われてね。ただその代わり女子用のは無償だけど」
「そうなんだ。（段々女の子っぽい話し方になってるのは気にしないでおこう…）」
（ふむ…やはり連続のリセットは体力を消耗する…体育祭のためにも、体力をもっと付けないとな…）
ちなみに、勝矢の姿は普通に他の組の人間に見られ、翌日姿を見ようと来る者がいたが当然勝矢は元の姿なので見つけられず、『Ａ組に幻の美少女がいる』としばらく話題になったのであった。

Ｎｏ．１１　体育祭前トレーニング―２

「ねぇねぇ真和須くん！その見た目ってことはさ、今日の個性は『酸』でしょ⁉？」

体育祭が目前に迫ったある日、勝矢の机に身を乗り出してワクワクした表情で問いただす芦戸に、勝矢はそのテンションの高さに若干戸惑っていた。彼女が指摘してる通り、今の勝矢の姿は髪から皮膚に至るまで全身ピンク色で白目は黒くなり黄色い瞳、頭に生えた角のようなものがあり、殆ど芦戸と変わりない見た目だった。違うとすればピンクの色味が白に近いのと、角の数が三本といったくらいである。

「あ、あぁ。そうだが…」

「ならさ、今日空いてるなら個性の応用とかを教えてくれるかな⁉？」

構わないよ、と勝矢が答えると芦戸は「やったー⁉？」と嬉しそうに飛び跳ねていた。当然スカートもジャンプに合わせて揺れ動くので、中を見ようと峰田と上鳴が目をこれでもかと凝らすが当然の如くその行いは周りにバレ、いつものように耳郎からの制裁を受けたのであった。

すると、爆豪が勝矢の元にやってきた。

「オイ、日替わり」

「（日替わり⁉？）な、何の用？」

「俺にアドバイスを寄越せ」

その言葉に一同は唖然となった。爆豪がプライドがかなり高いことは今までの行動から知っているため、プロヒーローならともかく、クラスメイトの勝矢に教えを乞うとは思っていなかったからだ。

「…い、意外だな。お前がそんな事頼むなんて…」

「あ？悪いかよ？さっさと教えろや！」

「ちょっとちょっと！私が先に特訓の話つけてたんだけど⁉？」

「その通りだ。どうしても言うなら芦戸さんと一緒が条件だ。それを呑めないのならこの話は無しだ」

その言葉に爆豪が何か文句を言いたげにしていたが、毅然とした態度を取る勝矢を見て、チッ⁉？と大きく舌打ちをした。

「…わーったよ、それで構わねぇ」
「理解してくれて助かるよ。じゃあ放課後に」
（あのかっちゃんが素直に言うこと聞くなんて…!!?）
やりとりをみて驚いている緑谷だが、爆豪には爆豪なりの考えがあった。
（あのデクをあそこまで伸ばせた日替わりのアドバイス能力は悔しいが確かだ。ここで我を通して機嫌を損ねさせたら二度とアドバイスを受けられねぇ可能性がある。ここは我慢するしかねぇか）

放課後、トレーニングルームにて勝矢は二人の前に立って話し始めた。
「さて、これから始めるわけだけが、どんな感じに伸ばしたいか教えてくれるか？」
「はーい！私はより遠くまで酸を飛ばしたい!!?」
「爆破力の強化」
二人の要望を聞き、勝矢はふむ…と顎に手を当てて考えた。
「なるほど…わかった。まずは芦戸さんからだ。これは簡単だ、水鉄砲と同じで指と指の間から出すイメージでやれば出来る。こんな風にね」
そう言い勝矢は手をチョキの指同士をくっつけた状態にし、酸を出した。すると、酸は勢いよく遠くに飛んでいった。
「お～!!?デ〇ビームだ!!?」
「まぁそんなとこだ。んじゃ、やってみて」
芦戸はさっそく言われた事を実践してみるが、勝矢ほど勢いよく飛ばずにいた。
「ん～！これ結構集中力いるなぁ～」
「慣れてけば自然にできるさ。難しいようなら親指加えて三本指でやってみたらどうだ？」
「おっ!?!?出た出た!!?やったー！」
「ならそれで慣れてっていくと良い。どんどん鍛えればこんなふうに爪の間から出せるようになる」

勝矢は両手を広げると、その爪の間から連続的に酸を飛ばし始めた。それをみた芦戸は目をキラキラと輝かせた。
「何それすっごくカッコイイ‼?」
「ただ、これは消費が激しいから使い過ぎに気をつけることだね。それと、溶解度を限界まで下げて粘度を上げれば人に当てても平気かつ、それなりのダメージを与えられるようになる。その場合は飛距離は粘度に応じて下がるけどな」
勝矢が芦戸にアドバイスしている間、その様子を見ていた爆豪はある事を思いついていた。
(範囲を狭める、か…!なるほど、端役(モブ)の会話でも役に立つものはあるな…これは個人でやっておくか。下手に手の内を見せたくねぇしな)
しばらくすると、勝矢が爆豪の元に近づいてきた。
「待たせたな爆豪、さっそくだが…手のひらを見せてくれ」
「あ?なんでだよ?」
「確認のためだ」
不審に思いつつも爆豪は勝矢に両手のひらを見せる。勝矢は手のひらをまじまじと見ると感心したように息をついた。
「…なるほど、手入れはしてあるみたいだな」
「っ!その言い方、てめェのガチャに『爆破』があンのか?」
「いいや、ただ手のひらから爆発するのなら爆破の際に出た煤が汗腺に詰まって爆破の威力が下がるのではと思ってな。これならほぼ問題ないが…爆豪、今から人体に影響ない程度の酸を出すからそれで手を洗ってくれ。手のひらの細かい汚れや古い角質を落とすと同時に、物理的に汗腺を刺激させる。痛かったら言ってくれ、弱める」
「……」
爆豪は勝矢が出した酸で手を洗い、水道で水を使って酸を洗い落としタオルで手を拭く。そして爆豪が個性を使ってみると少しだけだが爆破の威力が上がっているのを見て爆豪は目を見開いた。
「…っ!中々やるじゃねぇか」
「これは単に溜まってた汚れを落としただけだ。何度もやると肌が弱くなって爆破に耐えられなくなると思うから気をつけな。あとは手

を熱いお湯につけて氷水で締めたあとまたお湯に…を繰り返して汗腺を広げる方法があるな」
「爆破は持ってねぇんじゃねぇのか？」
「爆破じゃないが、汗腺から物質が出る個性があるからその応用だ。近所にサウナがあるならそれ使うのもアリだな」
「……サウナは無理だ。ガキん頃暴発して出禁喰らっちまってんだ」
「……そうか」
その後、3人はそれぞれアドバイスを受けつつトレーニングを行っていった。
そして下校時間となり、爆豪は先に帰り、勝矢と芦戸は互いに個性について話し合いながら校門を出ていくと、紺色のサイドテールをした女子中学生が待っていた。
「あ、お兄ちゃんやっと来た」
「ん？何でお前ここに？」
「暇だったから来たの」
「真和須くん、この子って前に言ってた妹ちゃん？」
「初めまして、真和須真奈子（まなこ）です。兄がお世話になってます」
「いやいや、私の方がお世話になってるよ。あ、私芦戸三奈。よろしくね」
お互いに自己紹介をすると真奈子はまじまじと芦戸の顔を見ていた。
「ん～見た感じ今のお兄ちゃんと同じ見た目ってことは芦戸さんの個性は『酸』でお兄ちゃんからアドバイス受けてた感じかな？」
「そう！ちなみに、真奈子ちゃんの個性って何？」
「私はね、『目回しハンド』って言って、私の手のひらにある渦巻模様を見た生き物の三半規管を狂わせる個性だよ。渦巻が九割以上見えてないと効果無いのと自分にも効くのが弱点かな」
「へぇ～地味に強い個性だね～。それじゃ真和須くん、今日はありがとう！また明日ね～」
「ん、また明日」
芦戸が自身の自宅の方へ向かっていき、勝矢と真奈子は二人並んで

帰っていく。その途中、真奈子が勝矢に話しかけてきた。
「お兄ちゃんさ、クラスの子から個性について何か言われたりしてない？」
「別に、悪い風には言われてないよ。寧ろ俺が得た経験からのアドバイス貰ってお礼言われたりしてるよ。何でまたそんな事を？」
「いやね、さっき目付きの悪い不良みたいなのがいたからさ、心配でね…」
「あ～爆豪のことか…まぁ悪い奴ではないんだがな…」
　それを聞き真奈子は心配そうな顔を浮かべるが、勝矢はニッコリと笑い真奈子の頭を撫でていた。
「だーいじょうぶだ、あん時みたいなことは起こさないから心配するな。それより、体育祭の時、応援してくれよな」
「…うん。お兄ちゃんも、体育祭頑張ってね」
　――そして日は経ち、その時がやってきた。

Ｎｏ．１２　雄英体育祭：　第一種目

雄英体育祭当日、控室にてＡ組の面々は緊張をほぐしたり普段通りにして開会式まで待機していた。
（体育祭ではコスチュームは禁止か…俺の個性をアピールする為にもガチャのリセットを使うつもりだが、放送事故にならないよう祈るしかないな。それと、一応連続リセットに耐えられるよう体力を鍛えたが、なるべくはリセットは押さえておくか…）
「…僕も、本気で獲りにいく!!?」
そう集中していると、ふと緑谷の声が聞こえたので見てみると緑谷が轟に向けて意思表示をしていた。勝矢は近くいた切島に話を聞いてみた。
「なぁ切島。緑谷と轟、何があったんだ？集中してて聞いてなかったんだが…」
「あぁ、まず轟が緑谷にお前には勝つって宣戦布告して、それに緑谷が応えたんだ。まぁ俺たちもお前にアドバイス貰ったりで強くなったから二人に優勝させるつもりはねぇけどな」
「なるほどな…ま、俺も勝つつもりだが…こればかりはガチャ運次第だからな…」
そんな話をしてるうちに時間となり、飯田の先導のもと、彼らは入場していった。
『雄英体育祭！　ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る、年に一度の大バトル！どうせテメーらアレだろ!?？　コイツらだろ!?？ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星！ヒーロー科！　１年、Ａ組だろぉっ!?？』
プレゼントマイクの盛大なアナウンスのもと、入場したＡ組に割れんばかりの歓声が湧き上がり、かつてのオリンピックに取って代わったというのが間違いではない事を示していた。その後も他のクラスも入場していき、各組所定の位置に着いたところで、一年の主審である１８禁ヒーロー・ミッドナイトが壇上に上がった。
「１８禁なのに高校にいても良いものか」

「常闇、そもそもダメだったら初めからここに居ないだろ」
「む、確かにそうだな」
「オイラ的にはいい」
　常闇の疑問に勝矢が答え、その答えに納得していると峰田が欲望剥き出しの言葉を言い周りの女子から白い目で見られていた。
　そして、選手宣誓に爆豪が呼ばれ、壇上に上がっていった。
「せんせー……俺が一位になる」
「絶対やると思ったぁ‼?」
　切島の嘆きや周りのブーイングも意に介さず爆豪は親指で首を掻っ切る動作をしながら「せいぜい跳ねのいい踏み台になってくれ」と言い放ち、A組のヘイトが跳ね上がったのを感じ取った。そんな騒ぎも気にも留めず、ミッドナイトは第一種目の説明をし始めた。
「さーて早速第一種目いきましょう！第一種目はいわゆる予選、毎年ここで多くの者が涙を飲む（ティアドリンク）‼?　今年は障害物競走!!一学年の全クラスによる総当たりレース、コースはこのスタジアムの外周で距離は約４kmよ!!コースを守れば何でもあり!!さぁ位置につきまくりなさい！」
　それを合図に生徒達はゲートの前に集まるが、ゲートは狭いため多くの人が密集していた。勝矢はゲートから少し離れた場所に待機してスタートの合図を待っていた。
（ここでガチャ使うとフライング扱いになりそうだし、スタートと同時に速攻でガチャ回すか。どちらにせよ、轟あたりが何か仕掛けてきそうだし、離れた方が得策か）
「スタート‼?」
　合図とともに大勢の生徒が駆け出すなか、勝矢は即座にガチャマシンを召喚しガチャを回した。ふと前を見ると、ゲートを突破した轟が後方の地面を凍らせたらしく殆どの生徒が足止めを喰らっていたが、A組の面々はそれぞれの個性を用いて突破しているのがみえた。
（やはり仕掛けて来たか…さて、ガチャの中身は…ん?これ初めて出るやつだな。……なるほど、こういう個性か）
　玩具や組み立てるタイプのガチャには使い方や組み立て方法の説

明書が付いてるように、個性ガチャで出てきた個性はある程度の使い方や効果がわかるようになっている。それ故に今まで勝矢は出てきた個性の暴走で怪我などを負わずに済んでいたのであった。

出てきた個性について知った勝矢はそのまま走り、足止めを受けてる生徒を追い越していく。その様子を見ていたクラスメイト達は考えを巡らせていた。

（勝矢の奴…何が出たんだ？）

（見た目はそのままですから異形系ではありませんね…）

（今使ってないという事は何か条件があるのか、それともう使ってるのか…。リセットした素振りはないから使えるやつだと思うけど…）

『さぁ来たぜまずは第一関門‼？ロボ・インフェルノ‼？』

開けた場所に現れたのは入学試験の時に出てきた仮想敵のロボット達であった。１～３ｐｔの敵はもちろん、０ｐｔの巨大ロボも複数おり道を塞いでいた。普通科やサポート科の生徒はロボの数と大きさに怖気付いているなか、勝矢はほくそ笑んだ。

（雄英のことだからと考えてたが、やっぱりいたか！これなら個性が使える‼？）

勝矢がロボ達に向けて走っていく途中、轟が右半身の凍結を用いて巨大ロボの群れを凍りつかせていた。

「折角ならもっとすげえもん出してほしいもんだな…親父が見てんだからよ」

『Ａ組轟突破ァーー‼？すげぇーな！一抜けだ‼？』

ロボが凍ったことで道ができたと思い多数の生徒が通り抜けようとするが、わざと不安定な態勢で凍らせていたため、ロボが転倒し、後続を妨害する。

「やべえ誰か巻き込まれたぞ⁉？」

「死んだんじゃね⁉？」

「死ぬかァー‼？」

周りの心配を覆すように『硬化』を使った切島がロボの残骸から飛びだし、さらに似た個性を持ったＢ組の鉄哲が遅れてロボの残骸から

飛び出してきた。
「お、おい…さっきガチャみたいなの回してた奴も巻き込まれてなかったか⁉？」
「え⁉？真和須ゥー⁉？無事かァ⁉？」
一人の生徒の言葉を聞いて勝矢を探し始める切島だが、その数メートル先で残骸がモコモコと盛り上がっているのをみて安堵した。
「おぉ！真和須！無事だったか…て、うぉおお⁉？」
『おぉーーっと⁉？ロボの残骸からさらにロボが出てきたぞォ！こんなギミックは用意してないからこれは真和須の個性かァー⁉？』
マイクの解説の通り、ロボの残骸から5メートル弱のスクラップをつなぎ合わせたような人型のロボットが現れた。
個性『合体変形』。機械と融合でき、さらにそれを変形させることが出来る個性であり、それが今の勝矢の個性である。弱点としては最低でも人を覆う大きさの機械でなければいけないのと、視界はセンサー越しでなく肉眼でしか見れないのでそのための窓を作る必要があるため、その部分が必然的に脆くなることである。
「ふむ…今はこれが限界か…」
「真和須か？怪我はないのか？」
「ご心配なく、平気だ。それじゃ、先行ってるぜ！」
勝矢は脚部につけたキャタピラを稼働させ、高速でロボ地帯を駆け抜けていった。当然その姿は観客席に否応なしに目立ち、会場をざわつかせていた。
『コイツはシビィィーー⁉？順位上げとアピールを同時にやってやがる！ホントコイツの個性は面白いなイレイザー！』
『アピールは狙ってやってるわけじゃないだろ。…しかし、ガチャという不確定要素のなか、出てきた個性をすぐに上手く扱う臨機応変さはよく出来てる』
ガチャという言葉に反応し、他にどんな個性があるのか、またそれはどのくらいあるのかなどと観客席のプロヒーロー達が話し始めていた。
だが目立っているのは勝矢だけではない。爆豪は『爆破』を使って

宙に飛び、瀬呂や常闇も各自の個性でロボを乗り越えていった。そして緑谷はというと『フルカウル』を使って機動力を上げて地面を跳ねるように進んでいき、進行上にあるロボを殴り壊しながら進んでいった。

（うん…だいぶ制御出来てきてる！これならかっちゃん達にも追いつける！）

『上も下も派手にやっていくゥー！特に緑谷、全身光っててスッゲーな‼？』

マイクの実況を聞きながら、勝矢は感心していた。

（ふむ…だいぶ緑谷はあれから成長してるな。うかうかしてると追いつかれるな。この先何があるかわからない以上、油断せずにいくか）

Ｎｏ．１３　雄英体育祭：　第一種目～第二種目開始

『さぁーて次は第二関門!!?　落ちればアウト、それが嫌なら這いずりな！　ザ・フォール!!?』

第一関門を突破した彼らを待ち構えてたのは幾つもの深い谷にロープが繋いである綱渡り地帯であった。それを蛙吹や轟達は各々の個性を用いて渡り始めていき、またサポート科の発目という少女が自身が開発したアイテムで突破していった。

そして、勝矢はというとロボを纏ったまま駆け抜け、崖ギリギリで踏み込むと思いっきり飛び跳ねた。

「届けぇぇ!!?」

そう叫ぶがギリギリ届きそうになく、このままだと崖に衝突すると思われたが、ロープに手を伸ばして掴んでぶら下がった。どうやら妨害防止の為にロープとそれを止めておく器具はかなり頑丈にできてるのが幸いし、ロープが切れて落ちる事はなく、そのまま崖を登り進んでいった。

『Ａ組真和須、少々アブなかったが、第二関門を突破していくゥ!!?何かアレだな、ロボがガシガシ動くのはカッコイイな！お茶の間のボーイ達もそう思うだろォ!?!?』

『だが今ので右肘部分に負荷が掛かったみたいだな。見ろ、動くたびに右肘から部品が落ちてきてる。元々そういう風に作られたモンじゃないからあの時壊れなかったのが奇跡だな』

『おぉ本当だ！これじゃヘンゼルとグレーテルだゼェェイ!!?』

（痛いとこ突くなぁ…関節周りを何とかするのがこの個性の課題かな…次いつ来るかわかんないけど）

正直なところ、ロープを掴んだ時に嫌な音が聞こえヒヤヒヤした為、この解説はある意味自戒となっていた。自分の体でないので無茶して壊してしまう可能性があることと、周りには素材となる機械がない場合破損したらそのままとなるのが弱点と認識し、先に進んでいく。

『さぁ来たぜ最終関門!!?その名も『怒りのアフガン』だ!!?その先は

一面地雷地帯、よく見りゃ位置がわかるから目と足を酷使しな！もし爆発しても威力は大したことねえが、見た目と音は派手だから失禁必至だぜ‼？』
『人によるだろ』
　地雷地帯ではトップにいた轟が後続に道を作らないように最低限の地雷を無力化しながら慎重に進んでいくのに対し、爆豪はお構いなしに進んでいるのが見えた。勝矢はという地雷地帯前で立ち尽くして考えていた。ロボ自体そこそこの大きさのため踏む地雷の数も相当のものとなるため、先程から酷使してるせいで耐久に不安がある。そこでこの個性のもう一つの効果を使おうとしていた。
（後続に道を開けるが仕方ない、やるとするか‼？）
　後続の生徒が次々に地雷地帯に進む中、勝矢の纏うロボに変化が現れた。ギ・ギ・ゴ・ガ・ギ…と音を立て、不要な装甲を落としながら折り畳むように変形し、ある車体に変わっていった。
『おぉっと‼？立ちっぱなしだった真和須ロボが変形していく⁉？これは、まさか……
ロードローラーだッ‼？』
『なんだそのあだ名と言い方』
『変形合体』のもう一つの効果、それは一度の変形に対して一種類だけ乗り物を選択してそれに変形できる効果である。しかし当然ながら纏うロボを超える大きさの乗り物には変形出来ない事と、その乗り物についてある程度の知識が必要なのが前提条件である。
　勝矢が変形させたのはロードローラーに違いないのだが、ローラー部分が地雷処理ローラーと呼ばれる多数の凹凸がある物に変わっていた。そしてエンジン音を響かせて勝矢は全速力で地雷地帯を進んでいった。
「そぉーら！轢きたくないからどいたどいた！」
「おわぁ⁉？」
　先にいた生徒達は地雷を処理しながら迫りくる勝矢に驚き横に飛び退いていく。無論、轢くつもりはないので細心の注意はしている

が。
　ローラー部分に大部分の装甲を費やしたため、複数の地雷の爆発を受けても走行に殆ど影響はないが、別の問題が勝矢を襲っていた。
（ヤバ…思ったより揺れて気持ちわる…）
　乗り物酔いに抗いながら進んでいく勝矢はようやく轟と爆豪に追いついてきた。
「お二人さん、俺もトップ争いに混ぜな!!?」
「日替わりテメェ!!?セコい真似してんじゃねぇ!!?」
「セコいとは何だ、これも立派な個性だ。轟も後続の事考えなければここら辺凍らせるなり燃やすなりして地雷処理して突破してたろ?」
「まぁな…左は使う気はねぇが」
『真和須ローラーも交えてトップを巡る争いだァ!!?さぁ喜べマスメディア!!?お前ら好みの展開だ!!?』
　二人の背後に迫って道を空けさせようとする勝矢と、追いつかれないようにする二人の攻防が続き、道半ばに着いた時、背後から一際大きな爆破音が聞こえ、三人が振り向くと装甲板にしがみ付いた緑谷が飛んできて彼らを追い越した。
（あれは…俺がさっき落とした装甲板!??なるほど、あの状態（フルカウル）は体力を使うから、地雷集めて装甲板使って爆発させたってとこか）
「デクゥ!!?俺の前を行くんじゃねぇ!」
「後続に道作っちまうが、そうも言ってらんねえか」
　爆豪が吠え、轟が地面を凍らせて緑谷を追い抜かそうとするが勝矢は何か嫌な予感がした。緑谷は装甲板を蹴り付けて地面に叩きつける。当然地雷は装甲板に反応して爆発し、緑谷と共に吹き飛んでいく。
「へぶっ!!?」
　…乗っかるなりしてればいくらか格好がついたのだが、吹き飛んだ装甲板にぶつかりながら飛んでいったので締まりがなかったが。
『緑谷、間髪入れずに後続妨害、アーンド爆風で加速!!?少々格好悪いが地雷原を速攻クリア!そのあとに続いて轟、爆豪、真和須と続いて…いや、真和須が何かしようとしてるぞ!?!?』

「いっけぇぇ‼?・」
　マイクの指摘した通り、勝矢は再び纏っていたロードローラーを人型に戻すと、ロボの左手で自分自身を掴むとゴールに向けて投げ出した。勝矢はそのまま宙を舞い、緑谷を追い越して地面に転がりながら着地した。
『真和須が自分自身を投げて追い越したぁ⁉?スゲー事やるな‼?イレイザーお前マジどんな教育してんの⁉?・』
『知らん。滅茶苦茶なのはあいつらの素養だ』
『さぁさぁこのまま真和須がトップとなるか⁉?』
『無視かよ』
　そのまま勝矢はゴールまで走り抜けようとするが、トップになる事に気を回して緑谷の個性の事を忘れていた。
（僕にはまだこれがあるんだ！ワンフォーフォール・フルカウル‼?・）
「あ”⁉?・」
　緑谷はフルカウルを発動し、機動力を上げて勝矢に迫り、追い越していった。
　勝矢はなんとかしようにも、自分自身を投げたので纏うパーツもなくその上乗り物酔いで少しふらついていたため、なす術なくゴールを許してしまいその後轟と爆豪にも抜かされて結局４位となった。
『まさかまさかの大逆転‼?・誰がこの展開を予想できた⁉?・今１番にスタジアムに帰ってきたその男、緑谷出久の存在を‼?・』
　歓声が沸くなか、勝矢は悔しげな顔で緑谷に近寄った。
「あ～惜しかったなぁ…個性の事忘れるとは…」
「僕も正直ヒヤヒヤしたよ、うっかり使わずに走りそうだったし」
「マジか…忘れてりゃ良かったのに…」
「あはは…それと真和須くん、身体結構打ってたけど大丈夫？」
「少し痛いが平気だ。どうやらこの個性だと大きな機械を纏う関係で少し身体が丈夫になるらしい」
　二人は後続を待ち続け、４２名が通過した所で第一種目は終了した。
――――

『予選通過は４２名!!?落ちちゃった子も安心なさい。きちんと見せ場は用意してあるわ！さぁいよいよ本選、第二種目は…騎馬戦よ!!?』

ミッドナイトの説明によると、２～４人で騎馬を組んでハチマキを奪いあうのが大まかなルールだが、個性の使用が自由なのはもちろん、大きく二つの特徴がある。

一つはこの種目は制限時間式であり、時間内なら騎馬が崩れようがハチマキをとられようが失格にはならず、奪い返せる点。もちろん崩し目的など悪質な攻撃は即失格だが。

二つ目は試合結果はハチマキに書かれてる点数の合計で決まる点。

点数は障害物競争の順位に応じ個人個人に与えられ、チームメンバーの点数合計が、そのチームのハチマキの点数となり騎手に渡される。その点数だが、４２位を５Ｐｔとして、順位が上がるごとに５ずつ上昇していくのだが…ここでミッドナイトがとんでもない発言をした。

『ただし一位は特別よ!!?そのポイントなんと…一千万ポイントよ!!?』

「…一千万？」

アホみたいな点数に緑谷が慄くと周りの視線は一気に緑谷に注がれた。そして騎馬を決めるための１５分間の交渉タイムとなった。この間も個性の使用は許可されてるため（無論攻撃は厳禁だが）勝矢は早速ガチャのリセットを行った。

とはいえ、チーム以外に個性を知られたくないので速攻でカプセルを割ったので恐らく何の個性が出たかは他の人にはバレてないだろう。

（ふむ…これか。騎馬戦には不向きだが…いや、いけるか？）

ふと見ると、麗日といた緑谷が飯田を仲間にしようとして断られているのが見えたので勝矢は二人に近寄った。

「二人とも、空きがあるなら俺が加わっていいか？」

「真和須くん？狙われるけどいいの？」

「狙われるのは承知の上だ。それに、今の個性なら騎手でいた方が有

利なんだ。俺が騎手でいいか？」
「良いけど…今の真和須くんの個性は何？」
「それは…」
　勝矢は自身の今の個性を説明した。
「なるほど…だいぶ癖があるけどかなり強力な個性だね」
「まぁな、でも上手くいけるかだな。それと、あと一人は『あいつ』がまだ組んでなければ…あ、いたいた、おーい！まだチーム組んでないか？」
　勝矢はある人物に声をかけた。そして時間が過ぎ、いよいよ第二種目が始まろうとしていた。
『Ｙｅａｈ！ア・ゲ・テ・ケ鬨の声！血で血を洗う残虐バトルロイヤル！カウントダウンいくぜ！３、２、１……スタートォ！』
「実質一千万（それ）の争奪戦だ！」
「いただくよ真和須くん‼？」
　真っ先に来たのはＢ組鉄哲チームとＡ組葉隠チームであるが次の瞬間、勝矢の身体が消えたのであった。
「は⁉？」
「ええ⁉？透明化なの⁉？」
　慌てる二人だが、そのうちの鉄哲のハチマキが突如奪われ、消えていった。
「な⁉？俺のハチマキが！」
　しばらくすると、勝矢の姿が再び現れ、その手には鉄哲のハチマキが握られていた。
「よし！しばらく逃げてくれ」
「わかった！にしても、本当すごいねその個性！」
「いや、今回はたまたま取れただけだ。次もこう行くとは限らない。常闇のおかげで上手く戻れたのもあるしな」
　今の勝矢の個性は『フェイズウォーク』。１５秒の間自身と自身の身体に触れてるものが生き物から見えなくなり、空中を移動できる個性であるがこの個性には三つほど大きな弱点がある。
　一つ目は１５秒経つ、もしくは途中解除すると再使用に１０秒待つ

必要があること。
二つ目は見えなくなるだけなので普通に相手の攻撃は通ること。
最後が一番大きな弱点で、勝矢自身も周りの生き物とそれが身につけてるものが見えなくなることなのだが、勝矢は相手の直前の動きから位置を予想して奪い取ったのであった。もちろん騎馬である緑谷達も見えないのだが、そこはもう一人のメンバーである常闇がカバーしてくれた。
彼の個性であるダークシャドウ、その要であるダークシャドウ本体は個性由来のものであり厳密には生き物ではないのでフェイズウォーク使用中も見えるのでは考え、交渉タイム中に確認したところ、見えていたのでそれを目印に戻ってこれた次第であった。
（とはいえ、まだ始まったばかり…油断はできないな…）